

REKIHAKU

The Future of History

歴博のめざすもの 事例集 1
博物館型研究統合の実践



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館
NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

はじめに

国立歴史民俗博物館は、日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関である。その使命は、人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において、未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにある。

歴博は、2004年の法人化を機会に、その基本理念と基本方針を再確認し、館外の皆様の理解をいただくため、小冊子『歴博のめざすもの』を刊行した（2007年3月）。本冊子は、この『歴博のめざすもの』において、歴博のもつ博物館機能を十分に発揮する独自の研究スタイルとして提唱した「博物館型研究統合」が、どのように実践されているかを具体的に示す事例を掲載するものである。〈資源〉〈研究〉〈展示〉の三つの要素を有機的に連携させる「博物館型研究統合」による成果と、その可能性の一端をご紹介できれば幸いである。

目次

紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究と公開	2
「高松宮家伝来禁裏本」の調査研究と公開	6
洛中洛外図屏風の調査研究と公開	10
総合展示第3展示室「近世」の再構築をめぐる研究	14
年代歴史学研究	18
映像制作による民俗研究と映像資料の保存・公開	22
参考編	26

歴博のめざすもの

—博物館という形態の大学共同利用機関として—

日本の歴史と文化の研究

—未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解を実現する—

博物館型研究統合の推進

—博物館という形態を活かした新しい研究スタイル—

共同利用性の充実

—研究資源・研究過程・研究成果を国内外の研究者と共有する—

新しい研究者の養成

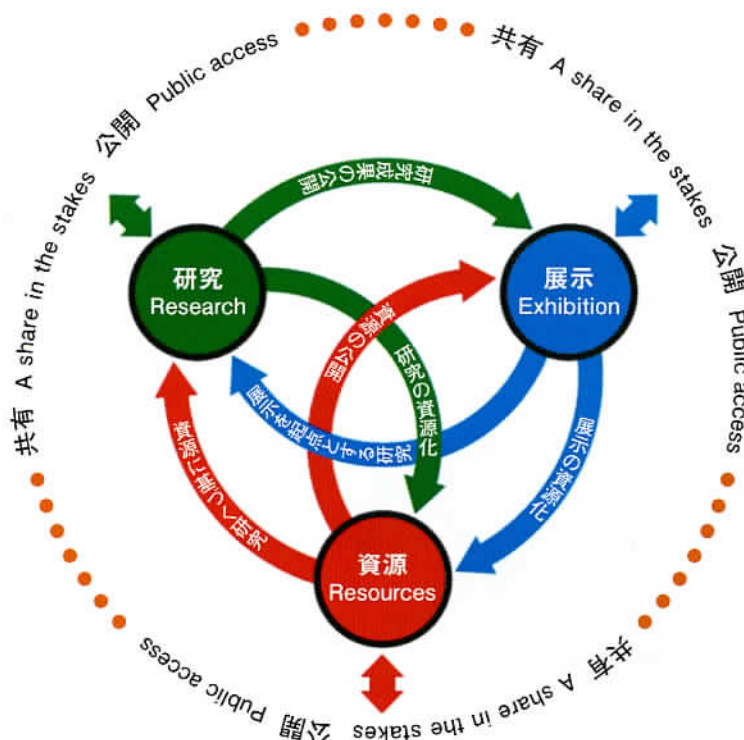
—博物館型研究統合を担う人材—

日本の歴史と文化への理解の促進

—多様な歴史像と柔軟な歴史認識を国内外のすべての人々に提供する—

博物館型研究統合

歴博は、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにその成果を積極的に共有・公開することによって、博物館という形態をもつ大学共同利用機関の特徴を最大限に活かした研究を推進している。



紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究と公開

歴博では、文献以外の資料を「もの資料」と呼び、文献資料と同じく重要な歴史資料と位置付けているが、本館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションは、「もの資料」に関連する文書資料が付属して伝世しており、資料研究の対象としては絶好の条件を備えているといえよう。しかし同時に、音楽という、形として残らない対象からいかに歴史を復元し、それをいかに公開するかという大きな課題を抱える資料でもある。この特徴あるコレクションに対し、各分野にまたがる人文科学のみならず、自然科学的手法を用いて多角的にとりくむことにより、複合型資料研究のモデルを構築し、さまざまな展示等の手法を検討しつつ、継続的に成果を公表していくのが本研究のねらいである。

【資源】

資料調査プロジェクト「紀州徳川家伝来雅楽器の調査」（平成13～15年度）（代表者 日高薫）

データベース作成「館蔵紀州徳川家伝来楽器」（平成16年度）（代表者 日高薫）

1. 収集資料の概要

本館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションは、紀州藩の第十代藩主徳川治宝（1770～1852）がほぼ一代で築きあげた最大級の古楽器コレクションである。



連管 銘「金龍」と付属品

総点数159件（231点）を数える本資料は、雅楽用の楽器を中心に、笙・笛・琵琶・箏・太鼓などの楽器20数種、楽譜、付属品など、さまざまな時代の楽器で構成されており、楽器史・音楽史研究上、極めて重要な資料として位置づけられる。

2. 収集の経緯

1953（昭和28）年に紀州徳川家より財団法人松江博物館へ譲渡された本コレクションは、文化財としての重要性和散逸の危機を認識した文化庁によって、1972（昭和

47）年に一括買い上げとなったもので、1979（昭和54）年に東京国立博物館に管理替え、さらに本館の開館にともない1983（昭和58）年移管された。ただし、紀州徳川家旧蔵の楽器としては、本コレクション以外にも、国立劇場所蔵の9点などが知られており、一部が散逸してしまっただことが確認できる。



徳川治宝の肖像

3. 収集資料の特色

本資料は、質・量ともに充実した古楽器コレクションとして、音楽史、とりわけ雅楽の歴史の解明に不可欠な資料であるが、付属文書・付属品に恵まれている点が際だった特色といえる。各々の楽器に伴う、入手に関わる情報・伝来・鑑定・銘の下書き・修理や製作に関わる情報などを記した付属文書からは、音楽・楽器の歴史のみならず、幕末期の大家を中心とした文化のありさまをうかがうことができる。また、工芸の粋を集めて装飾された楽器本体や箱・袋などの付属品は、美術工芸品としての価値も高い。多分野にまたがる研究資源として、また効果的な展示資源として、多くの可能性を秘めた資料といえよう。

その反面、必ずしも進展しているとはいえない楽器史研究の現状に加え、破損しやすく保存状態の悪いものを多く含むことや、各種技法・素材が混在する点な



琵琶 銘「白鳳」天武6年銘

ど、調査研究にとって、必ずしも好条件とはいえない要素も少なくない。資料の調査研究を進めると同時に、多くの付属品・付属文書をいかに整理・管理するかという実質的課題と取り組む必要もある。

4. 資料調査の概要と意義

専門家のあいだではよく知られた本資料であるが、付属資料を含めると膨大なコレクションであり、その全貌は明らかにされていなかった。2001年（実質的には1998年）より着手した資料調査プロジェクトでは、楽器そのもののみならず、付属品、付属文書の翻刻を含めた資料情報を、広く研究者・市民に公開し、利用に供することを目的としている。

資料調査は、①資料概要の把握と、調査・整理方針の決定、②整理と点検（過去に作成された目録との対照・

調書作成・コンディションチェック・研究用スナップ写真の撮影・データ入力）、③文書の翻刻、④資料撮影（全図・表・裏・部分・付属品・皆具の集合写真など）、④関連資料の調査 などを経て、研究的内容に至った。

5. 成果の公開

(1) 『国立歴史民俗博物館資料
図録3 紀州徳川家伝来楽器
コレクション』の刊行（平成15年度）資料解説・研究論文・文書翻刻・人名索引等を含む

(2) データ・ベースれきはく
「館蔵紀州徳川家伝来楽器」
（平成16年度）



資料図録

【研究】

併 共同研究「紀州徳川家楽器コレクションの研究」（平成18～20年度）（研究代表者 高桑いづみ）

1. 研究の目的

(1) 複合的視点からの楽器調査 本館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションを対象とし、音楽史、楽器史のみならず、美術史学、文献史学、自然科学など、多角的な視点からの資料研究をおこなうことが主たる目的である。楽器コレクション研究の問題点を明確にし、将来の発展的研究の基礎を築くことを当面の目標とした。対象となる資料に関しては、平成15年度の資料図録の刊行、平成16年度のDB公開によって、すでに基礎的な資料情報が整備されていたが、続く2005年夏に特別企画を開催したことにより、関係分野の研究者の関心も高まった。調査依頼や、より詳細な情報提供等、外部からの要請も高い。楽器の付属文書・その他の文献資料からの検討や、外見上の詳細な調査観察に加え、楽器内部の撮影や、透過X線撮影、使用されている素材の特定など、今後の楽器調査に求められる科学的調査方法の検討も合わせて行った。

(2) 楽譜類の研究 本コレクションは多くの楽譜類を含んでいるが、これらに関する基礎的な研究はない。コレクション中の30件の楽譜の奥書等を精査、また他の伝本と比較研究して、伝承の系譜を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の成果

(1) 笛類（龍笛25・能管2・高麗笛8・神楽笛4・簞箏15・計54点）に関して、①詳細な法量測定、②肉眼観察による構造・技法などに関する基本調査、③透過

X線撮影 →内部の形状・継ぎ合わせなどの構造の確認、④デジタル顕微鏡・蛍光X線撮影による分析調査などを実施した。

(2) 琵琶 23面に関して、①詳細な法量測定、②肉眼観察による構造・技法などに関する基本調査、③透過X線撮影 →内部の形状・構造の確認（一部の資料のみ完了）、④CCD内視カメラによる槽内観察 →内部構造と墨書銘の確認 を実施した。

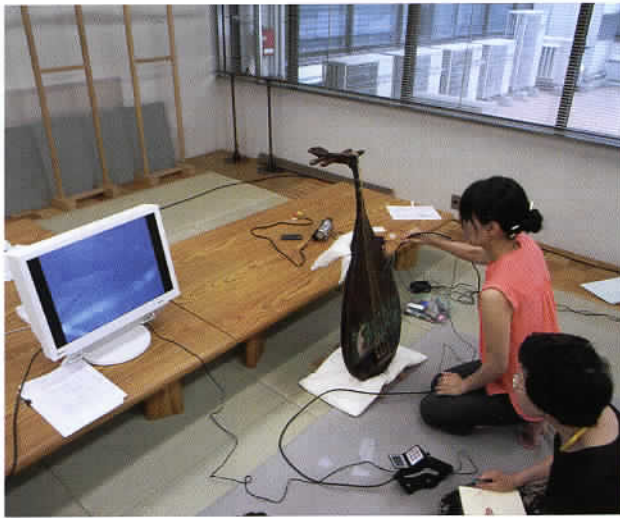
(3) 箏・琴類に関して、①詳細な法量測定、②肉眼観察による構造・技法等に関する基本調査 を実施した。

(4) 楽譜・文書の調査 ①楽譜類30点に関して、マイクロフィルムによる検討と実物資料の調査を行い、奥書を有する楽譜については、紀州徳川家と楽家との関係について検討した。②付属文書を精査し、資料図録における解釈の一部を修正するとともに、紀州徳川家と楽家との関わりなどについて新知見を得た。

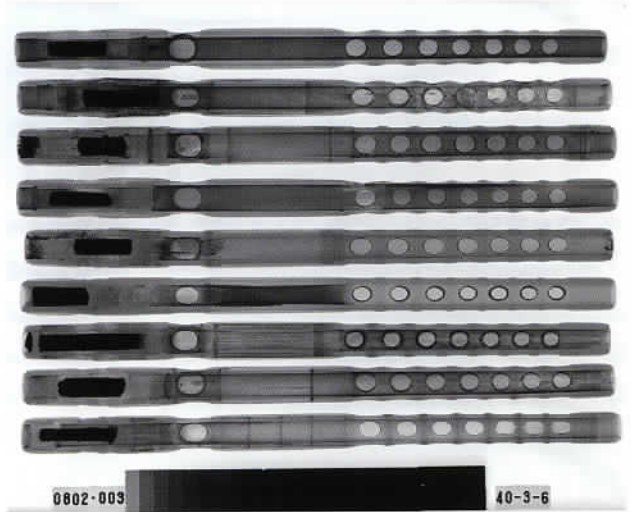
3. 成果の公表・社会への波及

(1) 報告書の刊行 論考および資料編（X線透過像など）による報告書を、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号として、平成22年度刊行予定。また、データ・ベースれきはく「館蔵紀州徳川家伝来楽器」の内容を修正・更新し、新しい成果を反映させる。

(2) 第3展示室ミニ企画展示「紀州徳川家伝来の楽器一筈一」（2008年10月7日～12月7日）において成果の一部を反映した。また、今後開催予定の企画展示・ミニ企画展示等で成果を公表する。



琵琶の槽内調査



龍笛のX線透過像

【展示】

特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」（2005年8月13日～9月19日）（展示代表者 日高薫）

1. 展示の趣旨

歴博所蔵のコレクションの中から、主要資料約90点を展示することにより、一般にはあまり馴染みのない雅楽と古楽器への理解をうながすとともに、江戸後期の大名家を中心とした文化の様相や、当時の高度な工芸技術を紹介することを目的とした。展示は、三部構成をとり、一部では紀州藩第十代藩主徳川治宝による楽器収集の経緯と時代背景、二部は雅楽器を中心とした古楽器の紹介、三部では付属資料からうかがわれる楽器の文化的役割を示した。資料の選定に当たっては、楽器以外に、楽譜や調律具、附属品、附属文書を交えて、コレクションが抱え込む豊富な資料情報が伝わるよう心がけた。



平成17年度夏に開催した企画展のチラシ



展示場風景

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

紀州徳川家伝来の楽器コレクションは、音楽史研究者や雅楽関係者のあいだでは比較的よく知られていたが、展示される機会が少なく、本館では13年ぶりの展示となったため、専門家のあいだでは反響が大きかった。会期中に東洋音楽学会・例会が開催されたため、多くの音楽研究者が訪れ、熱心なコメントが寄せられた。このほか、雅楽関係者など専門的な知識をもち、個々の資料に

についての深い情報を求めて訪れた観覧者も目立った。資料図録の刊行やデータ・ベースの公開と相まって、閲覧・借用の申請も増大した。

(2) 社会への波及・メディアの報道等

NHK-FM「ひるどき情報ちば」2005年9月2日

(3) 新たな研究課題の発見

資料図録の刊行と、企画展示の開催がきっかけとなり、楽器研究の重要性が認識され、本館共同研究の発足につながった。

総合展示第3展示室「ものから見る近世」 ミニ企画展示「紀州徳川家伝来の楽器―笙―」（2008年10月17日～12月7日）（展示代表者 日高薫）

1. 展示の趣旨

第3展示室のリニューアル・オープンにともない、本館の近世資料を展示するミニ企画の一つとして、順次、コレクションの楽器の展示・公開をおこない、その全貌を紹介する予定である。楽器種ごとの展示の第一弾として、本館が所蔵する笙11管すべてを展示し、進行中の共同研究の成果を一部反映した。

機会は少なく、関係者のあいだで話題になった。また、散逸していた紀州徳川家旧蔵の笙1管を併せて展示した。

(2) 社会への波及・メディアの報道等

千葉日報2008年10月8日・朝日新聞2008年11月11日・読売新聞2008年11月7日

(3) 新たな研究課題の発見

楽器として機能するかわからない特殊な形式の笙や、「袖笙」と呼ばれる小型の笙に関して関心が寄せられた。今後、複製制作等によって、これらの楽器がどのような音を奏で、どのような目的で用いられたかを究明する必要がある。

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

未公開の笙を含む11管の笙が一举に展示されるという

【新展開】

1. 関連楽器資料の収集（資源）

(1) 散逸した紀州徳川家旧蔵楽器資料の収集

本館所蔵資料の分かれとみられる紀州徳川家旧蔵の笙「鳳凰丸」（平成20年度）および「鶯丸」（平成21年度）を収集した。散逸した楽器資料については、今後も継続して調査・収集する。

(2) 音楽・楽器関係資料の収集

雅楽、および雅楽器と関連の深い能楽器等の関係資料を継続して収集し、詳細な調査・研究を行うとともに、展示等に活用する。平成21年度は鼓胴を購入した。

備等を考慮しつつ進める予定である。

- ③ 楽器の音の再現の問題 笛の実演奏と録音・ピッチ測定については、資料（楽器）の清掃・調整が不可欠であるため、保留とした。複製を製作してデータを採取する方法が、現状では最良の方法であると判断する。楽器の音の再現に関しては、研究的観点から重要であると同時に、展示における理解を深めるためにも極めて重要な問題であり、引き続き検討する。

(2) コレクション論的観点からの資料研究

江戸時代後期のコレクションとしての本資料の側面に注目した共同研究・シンポジウム等を、水木コレクションの研究プロジェクト（本館個別共同研究「水木コレクションの形成過程とその史的意義」）との連携研究として行う（計画の詳細は未定）。

2. 今後の研究課題（研究）

(1) 科学的調査

- ① 各種楽器のX線透過撮影を継続して計画的に実施するとともに、内部観察に関しては、より簡便で安全な調査方法を検討する。
- ② CTスキャン等を利用した素材の木質調査による樹種同定については、周到な計画が必要であり、今後の課題である。文化財資料の扱い・調査環境の整

3. 展示予定（展示）

- (1) ミニ企画展示の定期開催（1～2年に1回を予定）
- (2) 平成24年度企画展示「楽器をめぐる風景（仮題）」（2012年7月10日～9月2日開催予定）

「高松宮家伝来禁裏本」の調査研究と公開

「高松宮家伝来禁裏本」は日本歴史・日本文学関係の資料約1700点より成る。この研究課題は、国立歴史民俗博物館内外の研究者による共同研究の態勢を組織し、資料1点ごとに調査を行い、書誌情報を中心とするカードを作成してそのデータベースを構築してこれを広く公開することを第一の目的とする。第二に、この悉皆調査を通じて「高松宮家伝来禁裏本」の性格およびその形成と伝来の過程を多角的な視点から解明する。そのために、個々の共同研究員がそれぞれの専門研究領域においてこの課題を追究し、研究成果を公表する。

【資源】

※ データベース作成（平成17～18年度）、「研究資源共有化における歴博データベースの拡充」（平成20～21年度）

1. 収集資料の概要および経緯

本館所蔵「高松宮家伝来禁裏本」は、旧有栖川宮家に伝来した書籍群である。有栖川宮家は1625年（寛永2）に後陽成天皇の第七皇子好仁親王が創設し、当初は高松宮と称していたが、第三代幸仁親王（後西天皇第二皇子）が1667年（寛文7）に宮家を継承したのちに有栖川宮と称し、近代に至った。この間、幸仁親王および第五代職仁親王の時期に禁裏本（中世末期から近世前期にかけて天皇家の文庫に集められた書籍群）の一部が有栖川宮家に贈与され、これが「高松宮家伝来禁裏本」の主要部分となっている。

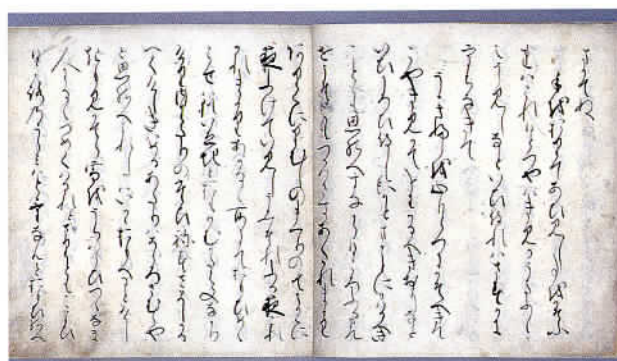
1913年（大正2）、大正天皇の第三皇子宣仁親王が有栖川宮家の祭祀を継承して高松宮の称号を受け、これにともなって旧有栖川家の蔵書も高松宮家に伝えられることとなった。1987年（昭和62）に宣仁親王が死去したのち、「高松宮家伝来禁裏本」は国（文化庁）に譲渡され、同年10月、その大部分が本館に移管された。

2. 収集資料の特色

「高松宮家伝来禁裏本」の中心は近世前期に書写された新写本であり、それ以前の古写本はさほど多くはない。しかし新写本とはいえ、それらは良質なものが多く、日本文学・日本歴史研究の資料として重要な位置を占めている。

有栖川宮家は和歌と書を家職としており、したがって和歌や書道関係の写本が多数を占めている。とりわけ、伏見天皇（1265～1317）自筆の『伏見天皇宸翰御歌集』をはじめとする鎌倉・室町時代の天皇自筆の歌書、二条為世が書写した『古今和歌集』など、和歌の家である二条家の歌人の筆になる勅撰和歌集や歌学書のような古写本が含まれていることが注目される。

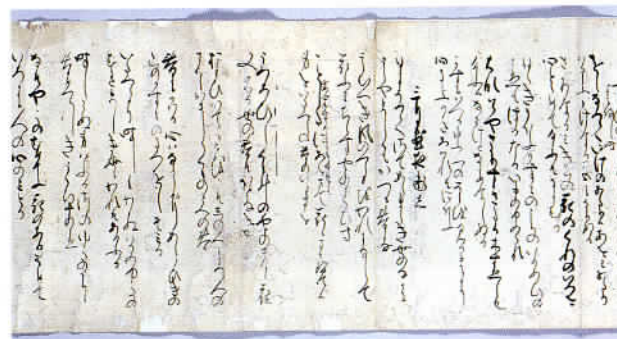
また歴史関係の書籍としては公家の日記（『中山内府



源氏物語 帚木（後光厳院筆）



詞花集（伝二条為忠筆）



伏見天皇宸翰御歌集

記』等) および日記を事項別に部類し編纂した部類記(『踐祚部類鈔』『神社御幸部類記』等)など、南北朝・室町時代の古写本がある。また『続日本紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』は新写本ではあるが、「国史」の善本として重要である。

3. 資料調査の概要と意義

「高松宮家伝来禁裏本」の資料調査は、以下の共同研究として実施した。

- (1) 歴博共同研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」(平成15~18年度)(研究代表者 吉岡眞之)
- (2) 歴博共同研究「高松宮家伝来禁裏本の総合的研究」(平成19~20年度)(研究代表者 吉岡眞之)
- (3) 人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の文

庫と古典学の研究—高松宮家伝来禁裏本を中心として—」(平成17~20年度)(研究代表者 吉岡眞之)
「高松宮家伝来禁裏本」については、1960年代に宮内庁書陵部が作成した簡単な目録(未公開)と、同じく宮内庁書陵部による『高松宮御所蔵 旧有栖川宮御本マイクロフィルム目録』(1969年刊行)によってその内容の概略を知ることができるに過ぎなかった。今回の資料調査では資料1点ごとに詳細な内容を記録したカードを作成し、データベース化した。この調査結果を公開することにより、研究基盤を大きく整備することができた。

4. 成果の公開

- (1) 人間文化研究機構総合推進事業「研究資源共有化における歴博データベースの拡充」(2009年)

【研究】

- ① 共同研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」(平成15~18年度)(研究代表者 吉岡眞之)
- ② 共同研究「高松宮家伝来禁裏本の総合的研究」(平成19~20年度)(研究代表者 吉岡眞之)
- ③ 人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の文庫と古典学の研究—高松宮家伝来禁裏本を中心として—」(平成17~20年度)(研究代表者 吉岡眞之)

1. 研究の目的

歴史・文学の研究は、まず研究の基本となる資料の調査研究を踏まえることによって豊かな成果を生むことができる。したがってこの研究課題では、従来必ずしも十分に行われていたとはいえない資料の調査研究を行うことを第一の目的として設定した。

①は「高松宮家伝来禁裏本」の悉皆調査を行い、詳細なデータを収集してそれをカード化することを目的とし、②は、①のカードにもとづいて資料目録を作成することを目的とした共同研究である。また③は、禁裏文庫の資料調査を継続して進める一方、①②を前提として、「高松宮家伝来禁裏本」とそれを含めた禁裏文庫の蔵書形成の諸相および禁裏の蔵書の学術的意義の解明を目的とした。

2. 研究の成果・成果の公表・社会への波及

- (1) 国立歴史民俗博物館資料目録〔8-1〕『高松宮家伝来禁裏本目録〔分類目録編〕』および同〔8-2〕『高松宮家伝来禁裏本目録〔奥書刊記集成・解説編〕』(いずれも2009年)の刊行。
- (2) 『人間文化研究機構連携研究「文化資源の高度活用」中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究—高松宮家伝来禁裏本を中心として— 研究調査報告書1』(2007年)および『同 研究調査報告書2』(2008年)の刊行。
- (3) 『禁裏本と古典学』(塙書房、2009年)の刊行。

前項①②の調査研究により、禁裏文庫の蔵書の一部が旧有栖川宮家に流入した経緯が明らかになり、また「高松宮家伝来禁裏本」と公家(近衛家・冷泉家など)の蔵書との関係についても新たな知見を得ることができた。その成果が上記(1)の『目録』である。これにより「高松宮家伝来禁裏本」の全体像が広く周知されることとなり、熟覧の申請も増加しつつある。

また③の研究成



『高松宮家伝来禁裏本目録』



連携研究成果論文集

果は、上記（2）および（3）にまとめて刊行した。この研究課題全体の集約として刊行した（3）『禁裏本と古典学』では、「第一部 禁裏・宮家文庫形成」、「第二部 記録と文書の伝来」、「第三部 歌書と注釈の製作」にお

いて、中世・近世における古典研究の実相の解明が多面的に追究され、「第四部 蔵書目録の解題と翻刻」においては、禁裏文庫研究の基礎となる資料が提示されている。これらにより禁裏本の学術的な意義が鮮明になった。

【展示】

※ 人間文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」（2005年10月18日～11月27日）

（展示代表者 吉岡真之）

1. 展示の主旨

この展示は、2005年が『古今和歌集』撰集1100年、『新古今和歌集』撰集800年に当たり、また和歌文学会など外部からの要望もあることから、本館が所蔵する和歌関係の資料を中心に企画したものである。しかしほぼ同じ時期に、本館と同じく人間文化研究機構に属する国文学研究資料館でも同様の展示を構想していたことから、機構

の連携展示として位置づけることとし、「うたのちから」を共通のメインテーマに掲げて両館でそれぞれ開催することとなった。本館の展示については本館、国文学研究資料館および和歌文学会に所属する研究者によって構成される展示プロジェクト委員会を設置した。

ちなみに国文学研究資料館のテーマは「うたのちから－古今集・新古今集の世界－」である。

本館では「高松宮家伝来禁裏本」を中心に文学関係資料を多く所蔵しているが、従来はそれらを展示する機会が少なかった。また「高松宮家伝来禁裏本」を対象とする共同研究が進行している時期でもあった。そこでこの機会に「高松宮家伝来禁裏本」を中心とする文学関係資料を集散的に展示し、その学術的意義を広く社会に提示するとともに、和歌が持つ社会的役割を歴史学的に展示することを目的とした。

2. 展示の効果

（1）研究成果の社会への発信としての効果

この展示の関連事業として2005年10月8日に「歴博講演会」を開催し、「中世歌壇の種々相」と題して井上宗雄・立教大学名誉教授に講演をお願いした。また会期中の11月3日には「和歌と貴族の世界」のテーマで「歴博・国文研共同フォーラム」を都内で実施し、約300名の参加を



連携展示ポスター



展示場風景（1）



展示場風景（2）

見た。歴史・文学双方の観点から基調報告を行い、意見を交換したが、これは近年にない試みであったといえよう。なおフォーラムの記録は『和歌と貴族の世界 うたのちから』（塙書房、2007年）にまとめて出版した。

展示は、「高松宮家伝来禁裏本」を多数出展したこともあり、文学研究者や文学愛好家の注意を引いた。また本館の展示では和歌のさまざまな社会的役割という視点を取り入れて構成し、特に和歌の政治的・経済的な役割という観点からも和歌を位置づけることを試みたが、この試みは歴史研究者の評価を受けた。

(2) 社会への波及・メディアの報道等

『毎日新聞』2005年10月25日夕刊

『千葉日報』2005年11月8日

『週刊新潮』2005年10月27日号

『書道界』2005年10月号

(3) 新たな研究課題の発見

展示に当たっては、和歌文学研究と歴史研究、美術史研究の共同研究として準備を進めたが、各分野における文学資料の学問的評価の視点と研究方法の相違について深く議論することが共同研究の基礎にあるべきことが改めて認識された。



「歴博・国文研共同フォーラム」風景



フォーラム記録

【新展開】

1. 関連資料の収集（資源）

この研究を実施したことにより、禁裏本に共通する内のおよび外的特徴を備えた資料が各所に散見されることが判明した。

平成20年度に本館が購入した『名所歌枕』と題する資料は、名所を詠んだ古歌を載せる名所歌集で、後陽成天皇自身が編纂した『方輿勝覧集』の自筆本である。『方輿勝覧集』には、歌の配列の原理や歌の数が大きく異なる3種の写本が知られており、そのうちの2種の原本（ともに後陽成天皇自筆本）が「高松宮家伝来禁裏本」の中に伝わっている（H600-1300『方輿勝覧』、H600-1612『倭歌方輿勝覧』）。残る1種がこの『名所歌枕』である。本書はかつて禁裏、宮家もしくは公家などに伝来していたものと考えられ、禁裏本および「高松宮家伝来禁裏本」の研究に資する点が多い。このような資料の収集を継続的に行うことは禁裏本研究を深める上で必要である。

2. 今後の研究課題（研究）

「高松宮家伝来禁裏本」を含む禁裏の蔵書が宮家・公家の蔵書と深く関わりながら形成されてきたことは、共同研究、連携研究を進める過程で次第に明らかになったが、宮家・公家の蔵書の調査研究についてはなお不十分である。伏見宮家・桂宮家・九条家・近衛家・冷泉家など、良質な蔵書群を今に伝える諸家の資料の調査はとりわけ重要であるが、さしあたっては本館が所蔵する広橋家の蔵書や、田中教忠の旧蔵書に含まれる公家関係資料と、「高松宮家伝来禁裏本」を含めた禁裏の蔵書とを総体として考察することが必要であり、このような研究の蓄積が、前近代の国政のあり方を解明する上で重要な糸口となる。

洛中洛外図屏風の調査研究と公開

歴博は、多くの洛中洛外図屏風を収集しており、特に現存最古の「歴博甲本」は著名な資料である。これらをまとめて展示した企画展示をきっかけに内容を読み解く研究が進み、さらに総合的な研究を行うために、科学研究費を取得して館外の研究者と共に共同研究を進めている。その一環として「歴博甲本」の制作当初を想定した復元複製の制作も行い、近く再度企画展示を開催して、新たな成果を発表する予定である。教育プログラムやデジタル技術を用いた公開方法についても実践的な研究を行っており、またこれらの活動が知られるに従って、新たな資料の情報も寄せられ、さらに資料の収集が進む見込みである。

【資源】

1. 収集資料の概要

洛中洛外図屏風は、京都と周囲の名所・風俗などを描いた絵画として知られる。およそ百点ほどが現存しているが、本館は関連資料も含めて、現在7点を所蔵している。

歴博甲本	室町後期
歴博乙本	室町後期
歴博C本	江戸前期
歴博D本	江戸前期
歴博E本	江戸中期
歴博F本	江戸前期
京都名所図屏風	江戸末期



「歴博甲本」(室町幕府の場面)

2. 収集の経緯

「歴博甲本」は、かつて「三条本」「町田本」と呼ばれる個人の所蔵であったが、文化庁によって買い上げられた後、東京国立博物館に移管、本館の開館に伴い、1983(昭和58)年に移管された。

その他は、市場に現れたものを本館が購入して、館蔵資料に加えたものである。

3. 収集資料の特色

洛中洛外図屏風を複数所蔵する機関自体が稀であり、本館の資料群は、間違いなく世界最多のコレクションである。時代や内容のバラエティーも豊富であり、本館の所蔵品だけで、室町時代の成立期から江戸末期の最終形態に至る変遷を追うことができる。

特に、現存最古の洛中洛外図屏風である「歴博甲本」と、やはり室町時代の景観を描いた「歴博乙本」という、初期の洛中洛外図屏風2点が含まれていることは貴重である。景観が室町時代に遡る洛中洛外図屏風は、写本を含めても4点しか確認されていないが、その内の2点が本館に所蔵されている。

4. 資料調査の概要と意義

各資料については、本館が受け入れた時点で計測・撮影などの基礎的な調査を行い、その後は描かれた内容などについても調査を進めている。(「研究」の項を参照)

5. 成果の公開

「データベースれきはく」の「館蔵資料目録」などで基礎的なデータを公開しているほか、ホームページの「Web



Webギャラリーの目次画面

ギャラリー」で、内容を読み解く解説や、見たい箇所を自在に移動・拡大することができる高精細画像を公開している。説明入りの画像も併せて提供している。

アドレス：

<http://www.rekihaku.ac.jp/gallery/webgallery.html>

【研究】

共同研究「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」（平成21～23年度）（研究代表者 小島道裕）

科学研究費「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究（基盤B）」（平成21～23年度）（研究代表者 小島道裕）

1. 研究の目的

「歴博甲本」は、戦前に紹介されて以来、現存最古の洛中洛外図屏風として著名な資料であり、『洛中洛外図大観』（小学館、1987年）などの写真版も刊行されているが、洛中洛外図屏風と言えば、狩野永徳の作とされる「上杉本」（米沢市上杉博物館）の方が有名で、研究も著しくこれに偏っていた。そのため、他の作品についての研究は乏しく、「歴博甲本」についても、専論は少なかった。

そこで、現存最古の作品であり、歴史資料としても高い価値を持つ「歴博甲本」を中心とした研究プロジェクトを発足させることとした。

きっかけとなったのは、2007年春に行った企画展示「西のみやこ 東のみやこ」であり、ここで歴史資料として描かれた個別画像の読み解きを行ったことから、描かれた内容と制作事情等についての見通しを得ることができた。また、絵画としても、現状は痛みがかなりあり、色彩も当初のものから相当変化していると考えられるため、制作当初の状態を想定する復元研究および復元複製の制作を行うことが、かねてから懸案となっていた。こうした問題について解明を行い、学界の共有認識とするために、総合的な研究に着手し、併せて活用の問題についても検討を深めることを目的としている。

2. 研究の成果

共同研究・科研費研究は今年度から開始したため、それについての成果はまだまとめられていないが、これまでの館内での研究成果としては、下記のようなものがある。

(1) 描かれた名所等の比定

企画展示「西のみやこ 東のみやこ」で、すべての館蔵洛中洛外図屏風類について、描かれた名所など基本的な画像についての比定を行った。

(2) 歴博甲本の人物比定と制作事情の解明

歴博甲本については、制作事情、年代、作者など、成立に関する基本的な事実が解明されていなかったが、描かれた人物像の比定を通じて、管領細川高国が、幕府御用絵師格の狩野元信に命じて、1525年（大永5）嫡子植国の家督継承を機に制作させた、という説を提示するこ



「歴博甲本」の主人公 細川植国（左）

とができた。これについては記者発表を行い、内容の「解読」に成功したものとして新聞等でも報道された。

(3) 初期洛中洛外図屏風の系譜関係の解明

歴博甲本の作者・成立事情などを明らかにすることで、それ以後の洛中洛外図屏風との関係、すなわち狩野派の一連の作品であることも明らかになり、やはり明らかでなかった東博模本の成立事情（阿波細川氏周辺の発注）や、歴博乙本の位置づけ（非権力者による発注と風俗画への指向）など、これまでにない説を出すことができた。

(4) 歴博甲本の復元的研究

歴博甲本については、復元複製の制作を目標として、科学的な調査も始めている。今年度は、高解像度のスキャナーを用いて、高精細デジタル画像を作成したが、その際、絵具類の反射にも留意して行ったため、地色部分に



高精細デジタル画像（地色の金泥も見える）

金泥がかなり残っていることなどの事実が判明した。今後、必要に応じてさらに科学的な調査も行うことで、かなりの精度で制作時点への復元が可能になるものと思われる。

(5) 主要論文・著書

以上に関して、これまでに発表した主な論文・著書に次のものがある。

小島道裕「洛中洛外図屏風歴博甲本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集、2008年

同 「洛中洛外図屏風『東博模本』の成立事情および『朝倉本』に関する研究」『総研大文化科学研究』第5号、2009年

同 『描かれた戦国の京都—洛中洛外図屏風を読む—』吉川弘文館、2009年

3. 成果の公表・社会への波及

歴博甲本の成立事情や作者の問題については、2007年8月31日の記者発表で新説として報告し、各紙に記事が掲載された。

毎日新聞 2007年9月6日

日経新聞 2007年9月11日

産経新聞 2007年9月21日

朝日新聞 2007年10月4日

読売新聞 2007年10月19日

【展示】

企画展示「西のみやこ 東のみやこ —描かれた中近世都市—」（2007年3月27日～5月6日）（展示代表者 大久保純一）

1. 展示の趣旨

2007年3月～5月の「西のみやこ 東のみやこ—描かれた中近世都市—」は、豊富な資料を有する館蔵の中近世都市図を中心に構成したもので、鎌倉の所領指図に始まり、都市の全景を鳥瞰図として描いた洛中洛外図屏風や江戸図屏風、そして、名所・行事をクローズアップした「長崎諏訪祭礼図屏風」や、詳細な行政用の都市平面図として著名な「堺大絵図」、江戸の名所を描いた錦絵のシリーズと、それぞれの都市に関する資料を展示するだけでなく、都市図の歴史的な流れについても追えるような内容とした。

また、絵画を歴史資料として生かすために、細部の読み解きを心がけ、部分図によるパネル解説やタッチパネルなどの展示の工夫に加え、屏風のレプリカを向き合わせて体感する展示や、体験コーナーでの実物大パズルやワークシート、めくり式クイズなど、さまざまな手法を用いて内容の理解を図った。

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

7点の洛中洛外図屏風類など、館蔵の都市図関係資料をまとめて展示する機会はこれまでなかったため、図録ともども歓迎されたが、一方で、展示替えのために同時には見ることができず、今後一度に見られるようにすることが求められた。

また、単にまとめて公開するだけでなく、時系列で系統立った展示を行ったことも、豊富に館蔵資料を持っている本館ならではのことであった。

そして、個別画像の詳細な読み解きを試みたことは、人物比定や制作事情の解明など、新たな研究成果をもたらす結果となった。

この他、タッチパネルによる拡大や、レプリカをむき出しで置く立体的な展示、実物大のパズル、めくり式クイズなど、絵画資料に親しみ、画像の理解をうながすプ



屏風を向き合わせて京都の地理に合わせた展示



実物大パズルを用いた教育プログラム

プログラムを開発し提供したことも、資料を活用する方法として注目された。

企画展示図録『西のみやこ 東のみやこー描かれた中近世都市ー』では、すべての館蔵洛中洛外図屏風類をはじめとする多くの都市図を掲載・解説し、資料と研究の普及の上でも大きな効果があった。

常設展示においても、これらの成果を元に、毎年文化の日前後に行っている「歴博甲本」の原本公開の際に、新たな研究成果を公開する解説シートを発行し、ギャラリートークを行っている。

(2) 社会への波及・メディアの報道等

新聞掲載：朝日新聞 2007年4月11日夕刊（「水曜ア－

ト」欄）で、出品した「歴博乙本」が取り上げられた。

また、日経新聞では、この展示の取材をきっかけとして、洛中洛外図屏風特集が三回にわたって生まれ、2008年6月8日（「美の美」欄、18面・19面）には、本館の研究に基づいて「歴博甲本」が大きく紹介された。

(3) 新たな研究課題の発見

個別画像の読み解きから、制作事情などの歴史的背景が解明されるようになり、またデジタルデータによる新たな活用や復元への展望も得られたため、これらを元にさまざまな分野にわたる総合研究として共同研究を立ち上げ、また科学研究費を申請して採択される所となった。

【新展開】

✂ 企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画（仮題）」展示プロジェクト（平成21～23年度）（代表者 小島道裕）

✂ 人間文化研究機構連携展示準備研究「洛中洛外図屏風と風俗画、そして地誌（仮題）」（平成21年度）

（研究代表者 小島道裕）

研究としては、画像の読み解きと復元複製の制作を進めつつ、そこで生じたさまざまな問題を、文献、美術史、服飾史、建築史など多くの専門分野からの学際的な研究によって、総合的な研究としてとりまとめることを目標としている。

展示についても、洛中洛外図屏風がその後どのように展開し、さまざまなジャンルの資料に受け継がれていったか、という観点から、新たな企画展示を予定している。

これについては、同じ人間文化研究機構に属する国文学研究資料館の研究者と共に、文学の分野と重なる地誌的な資料を含めた連携展示に発展させることも構想しており、現在予備研究を進めている。

また、常設の総合展示も現在リニューアルが進められていることから、数年後には、「歴博甲本」のレプリカを立体的に展示し、内容を読み解いていくタイプの新しい展示を作る計画がある。

資料収集の上でも、本館の展示や研究成果が知られて

きたため、洛中洛外図屏風関連の情報も寄せられるようになっており、今後さらに充実していくことができると思われる。

資料の公開と活用の点では、ホームページを利用して、さらに高精細な画像や、その読み解きなどを提示しつつあり、世界的な利用に供することで、日本の歴史と文化を理解する上での一つの中核的な素材としていくことを目標としたい。

今年度は、本館をひとつの基盤機関とする総合研究大学院大学において、「歴博甲本」を対象としたeラーニング教材を制作している。これもそのような新たな展開のひとつとして位置づけることができる。

この他、博物館学分野の共同研究においても、「歴博甲本」の活用プログラム開発や教育用ミニ屏風の制作を行っており、それらを用いた実践的な研究もさらに進めていく予定である。



幕府門前を歩く一行。武士ではなく、関白近衛種家（二人目）と父尚通（先頭）に比定される。



近衛邸の二世帯住宅。共に室内に人がおらず「留守」の表現であることを明らかにした。

総合展示第3展示室「近世」の再構築をめぐる研究

総合展示第3展示室「近世」の展示のリニューアルを獲得目標とするものであり、3つの館内の研究・プロジェクトの集合体である。これまでに館が収集してきた史料群および展示再構築に向けて新たに収集した史料群のなかから、どのようなストーリーを組み立てることができるかについて調査・研究するだけでなく、同時に博物館における歴史展示のありかたをめぐるという博物館表象論（とくに歴史表象論）研究を進める。さらに、博物館における来館者研究や教育活動についての実践的博物館研究をも踏まえて実際の展示を再構築するというものであり、あしかけ6年に及ぶ総合的な研究である。

- A 来館者研究・来館者向け見学プログラム開発研究を中心とする博物館研究（博物館研究）
- B 歴史系博物館における歴史叙述として展示のあり方を考える研究（展示表象論研究）
- C 第3展示室「近世」の再構築に関するプロジェクト（第3室展示プロジェクト）

【資源】

1. 収集資料の概要・経緯

本館では、1983年以降順番に各展示室を開室してきた。そのなかで多くの実物資料の収集、複製資料の製作を行い、総数は20万点余に及ぶ。このうち、第3展示室（近世）に関わるコレクションとしてまとまっているものは、錦絵、近世文書、絵図・地図、野村正治郎衣裳コレクション、装身具、輸出漆器・紀州徳川家雅楽器コレクションなど、多岐にわたり、たとえば『懐溜諸屑』データ・ベース化の基礎的研究（平成16～17年度、研究代表者久留島浩）のような研究を行ってデータ・ベース化を進めた。この史料群は、近世末期に落語家が収集・作成したと考えられる「貼混帳」で28冊からなり、店の広告から商標・包み紙、諸芸能（歌舞伎・落語・浄瑠璃）・開帳などに関わる広告、瓦版にいたる、実にさまざまな江戸市井の人々の生活に関わるものを内包している。都市の庶民の日常生活がよくわかる史料群である。なお、現物史料の購入・受託のほか、他館が所蔵する資料の複製・デジタル画像の作成な

ど、新しい「資源」化にも務めてきた。

2. 資料調査の概要と意義

館外所蔵品のうち、たとえば近世の那覇港や首里城を描いた屏風は、資料調査の結果、5点現存することを確認したが、3点は複製を、4点は高精細のデジタル画像を作成した。このデジタル画像をもとに、浦添市で公開研究会を開催し、画像史料の読み取りをめぐる議論するなど、デジタル画像化した「資源」を現地での研究活動と結びつけながら実施してきたところに意義がある。

3. 成果の公開

【展示】のところで述べるように、この【研究】【展示】のために収集した史料は、テーマを決めて毎年5回の特集展示で公開してきただけでなく、新たな企画展示も予定している。「懐溜諸屑」は、2006年からデータ・ベースれきはくで公開している。

【研究】

A 博物館研究

科学費「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成・歴史展示に関する総合的研究（基盤B）」（平成12～15年度）（研究代表者 佐原眞・小島道裕）

1. 研究の目的

(1) 博物館のこれからのありかたをめぐる実践的研究
「生涯学習時代」のなかで、博物館が学習・教育の場として果たすべき役割や可能性は拡大している。そこで、今後博物館教育を支えるためにはどのような人材が必要か、そのためにはどのような教育プログラムが必要か、どのような見学プログラムが可能か、見学の効果をどのように測定し評価するかについて、実際にプログラムを考案・試行・評価する。

(2) 歴史展示の持つ政治性についての研究 現在の博物館学では、歴史展示の持つ政治性についての検討は不十分で、展示する行為そのものを含めて総体的に見直す必要がある。そこで展示自体が容易ではない「少数民族」や「戦争」について展示をしている国内外の博物館で、展示理念や方法をめぐって、展示した学芸員と共同で研究する。

2. 研究の成果

- (1) 1998年から試行してきた来館者教育プログラムを充実させるとともに、来館者調査方法を考案・試行して、プログラムの評価方法についての研究も深めた。博物館で教育を担当する「教育員」の養成プログラムは、千葉大学と協力して試行した。
- (2) 「少数民族」展示では、アボリジニなどの展示についてオーストラリアの博物館、日系移民の展示についてアメリカの博物館をそれぞれ調査し、国内ではアイヌ民族についての展示をしている博物館を調査した。「戦争」展示では、ドイツ・中国・韓国の博物館を調査した。展示を担当した学芸員と展示をめぐって討論



「博物館教育養成プログラム：
高精細デジタル画像表示システムの活用」

する場を設けることができ、この共同研究の成果は国際シンポジウムで公開した。

3. 成果の公表・社会への波及

歴博フォーラム「歴史系博物館の現在・未来」（2002年11月）、国際シンポジウム「歴史展示を考える—民族・戦争・教育—」（2003年11月）などを開催し、その記録を『歴史展示とは何か—歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来—』（2003年アム・プロモーション）、『歴史展示のメッセージ』（2005年アム・プロモーション）として刊行したほか、博物館教育についての実践報告は『れきはくにいこうよ』として刊行した。歴博フォーラムおよび国際シンポジウムについては、『ミューゼ』（56号・62号）で詳しく紹介された。



フォーラム・シンポジウムの記録

B 展示表象論研究

共同研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」（平成16～18年度）（研究代表者 久留島 浩）

1. 研究の目的

歴史民俗・民族学系の博物館展示においては、他者の文化を「展示」という形で表象することがあるが、近年そのこと自体の問題性が問われており、また自文化とされるものも、歴史を遡れば、ある時点からは異文化とせざるを得ないことも認識されはじめている。こうした「異文化」や「自文化」についての議論を深めるため、一般には「鎖国」をしていたと考えられ、それゆえに独自の「自文化」が発展したと思われる近世（江戸時代）を対象とし、この時代の国際交流のありかたについて研究する。さらに、その研究成果を実際に展示というかたちで表現してみることで、その問題点を明らかにする。

2. 研究の成果

近世の国際交流（異文化交流）についての展示を実施している佐賀県立名護屋城博物館、沖縄県立博物館、長崎歴史文化博物館、アイヌ民族の「文化」を展示している北海道立開拓記念館などを調査し、展示を構想した学芸員や研究者と展示をめぐって研究会を開催した。「異文化」交流の様子は画像史料の展示で表象されることが多いが、この画像史料については当館が開発した高精細デジタル画像表示システムを用いて議論を深めるとともに、研究資源として広く研究者コミュニティで共有する方向性を示した。16世紀～19世紀の日本と東アジアにおいて、「日本人」が「他者の文化」をどう認識していたか、また「外国人」や「他民族」が「日本文化」をどう認識していたの

かについては、実際に「長崎におけるオランダ・中国との交流」という試行展示を実施し、観客調査・効果測定をした。



アイヌ展示の見学風景（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）

3. 成果の公表・社会への波及

全体の研究成果は、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号（歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究）として平成20年度に刊行し、試行展示およびその評価については井上由佳・久留島浩「国立歴史民俗博物館第3展示室リニューアルに伴う試行展示とその評価に関する考察」（『国立歴史民俗博物館研究報告』150集、2009年度）にまとめた。



研究報告

C 第3展示室「近世」展示プロジェクト 第3展示室展示プロジェクト（2003年～2008年）

1. 研究の目的

2008年3月に第3展示室をリニューアルオープンするため、その展示構成を考案し、解説を含めて実際の展示を構築することを目的とする。とくに同展示室では、近世の国際関係を大きく扱うので、朝鮮・琉球・オランダ・中国・アイヌという国や社会や人々との関係をどのように展示するか、同時代の日本の人々がこうした関係をどのように認識していたのか、といった点について検討することも具体的な課題とする。この点では、Aの成果を継承するとともに、Bとリンクさせながら研究する。とくに、この展示プロジェクトの実施にあたっては、Bのメンバーの参加を求め、両者が合同で研究会や博物館調査・現地研究会などを開催できるようにする点にこの研究の特色がある。

2. 研究の成果

リニューアルした第3展示室の展示そのものが成果であるが、展示構想についても3回の歴博フォーラムで公開した。展示プロジェクトメンバー以外の多くの研究者の参加を得て、研究者コミュニティに対して広く議論を喚起でき、展示という結果だけでなく、このような研究→展示という過程そのものが、研究対象として共有できることを確認した。

3. 成果の公表・社会への波及

歴博フォーラム「第3展示室リニューアルオープンの成果と課題 江戸時代とは何か？」（2008年4月26日）、人間文化研究機構第8回公開講演・シンポジウム「国立歴史民俗博物館 第3展示室リニューアルオープン記念 新しい近世史像を求めて」（2008年6月8日 東商ホール）を開催した。研究→展示の過程や詳細な展示構成は『第3展示室（近世）ができるまで—国立歴史民俗博物館総合展示リニューアルの記録—』（2009年3月）として刊行した。



歴博フォーラムのポスター



シンポジウムの風景

【展示】

総合展示第3展示室「近世」のリニューアルオープン（2009年3月18日）

1. 展示の趣旨

(1) 新しい近世史研究成果を展示に反映させる

最初の展示の準備から約30年が経ち、その間に大きく進展した近世史研究の成果をふまえて、「国際社会のなかの近世日本」「都市の時代」「ひととものながれ」「村から見える『近代』」という4つの大テーマからなる新しい展示を構築する。とくに、上述した【研究】との関係では、近世における人びとの「異文化」認識をいかに表象するかについて、「朝鮮との関係」、「長崎における中国とオランダとの関係」、「琉球との関係」、「アイヌとの関係」という4つの中テーマを構想して考える。

(2) 新しい展示方法を提案する

- ① 当館で研究開発した高精細デジタル画像表示システム（「歴史にタッチ」）を活用して、屏風などの絵

画史料が持つ歴史的情報を来館者が自由に引き出せるようにする。

- ② 「歴史にタッチ」の解説を4言語（日本語・英語・中国語・韓国語）にするほか、テーマ解説などの4言語表示を実現する。
- ③ 「いつ来ても新しい発見がある展示」を実現する。「地図・絵図にみる近世」「もの」からみる近世」というコーナーを設け、テーマを決めて実物の館蔵近世資料を公開する。
- ④ A博物館研究の結果、展示場で来館者がコミュニケーションや体験を行うと展示への理解や共感を高めることが確認できたので、体験コーナーや音・においを使った展示をする。



大テーマ「国際社会のなかの近世日本」



大テーマ「都市の時代」



寺子屋「れきはく」

2. 展示の効果

(1) 研究成果の社会への発信としての効果

新しい近世史研究の成果を、さまざまな来館者に、できるかぎりわかりやすく、しかも必要に応じてより深く伝えるという難しい課題に取り組み、とくに新しい展示方法を実施した。とくに4言語対応の解説は、外国人来館者の評価が高く、「歴史にタッチ」に対する来館者の評判も良好である。「歴史にタッチ」については、実際に利用した多くの国内外の研究者から画像史料を利用した研究を進展させるためにも有効であるという意見が寄せられている。さらに、体験コーナーとして「寺子屋『れきはく』」を設定し、近世の手習い塾のテキストの内容を実際に学ぶ、などのプログラムを用意したが、来館者には好評である。このコーナーでは、「歴博友の会」から募ったボランティアに来館者の体験を支援する活動をしているが、ボランティアにとっての「生涯学習」の場にもなっている。こうした新しい展示のありかたについては、『歴博』149号の特集や、『第3展示室（近世）ができるまで—国立歴史民俗博物館総合展示リニューアルの記録—』（2009年3月）などで広く発信した。

資源の公開という点では、『『もの』からみる近世』というコーナーで、研究のために収集・複製製作・受託をしてきた資料をも含めた特集展示をほぼ年5回実施してきた。

(2) 社会への波及・メディアの報道等

朝日新聞2008年3月12日・6月21日・8月30日、毎日新聞2008年3月31日、読売新聞2008年5月9日など

(3) 新たな研究課題の発見

近世史研究上での新たな研究課題が多く指摘されたが、「国際社会のなかの近世日本」に限って紹介すると、たとえば朝鮮との交流や民衆の朝鮮観について近代・現代まで見通した研究と展示が必要であるという認識が生まれ、本館の共同研究につながった。また、博物館研究では、来館者が新しい展示の内容をどのように理解し、どのような点で共感を覚えたかという点について、内容・展示方法の両面から調査・検討する必要があることがわかり、来館者調査とその評価方法をめぐる課題が指摘されている。



『歴博』の特集号
(149号)

【新展開】

1. 今後の研究課題

A 博物館研究からは、実践的な研究課題として、来館者調査・評価方法のさらなる改善が不可欠であることがわかった。来館者が展示をどのように理解し、展示を観たことでどのように変わったのか（変わらなかったのか）など、調査と評価の課題も含めてさらに明確にする必要がある。同時に、専門知識を持って展示する側と十分に持たないで展示を観る側との間をつなぐコミュニケーションのありかた、あるいは「利害や立場の異なる人々」の間での展示をめぐるコミュニケーションのありかたについても今後検討すべき課題であることが明確になった。この点は、平成18年度から始まった共同研究「博物館におけるコミュニケーション・デザインに関する研究」（平成18～20年度、代表者 佐藤優香）に継承されている。

B 展示表象論研究からは、現在の少数民族の問題も意識しながら議論する場合、括弧つきであれ「異文化」とひとくくりにしてよいのか、という課題が明確になったほか、「異文化」展示と観客との間のコミュニケーションのありかたについても実践的に考える必要があることがわかった。この点は、現在進めている第6展示室（現代）展示プロジェクトに引き継ぎながら考え続けるつもりである。

C 第3展示室展示プロジェクトからは、近世史研究のうえでの新しい課題がいくつか見つかったことはすでに述べた。また、A 博物館研究と関わって、2006年には、長崎に関する「試行展示」と来館者調査を行ったことにも触れた。今後は、来館者がリニューアルした展示とどのようにコミュニケーションをしているのか、についての来館者調査を実施するとともに、調査方法だけでなく

評価方法も含めた検討を行う予定である。

以上から、「総合展示第3展示室「近世」の再構築」という研究全体では、第3展示室という「具体的な展示の場」でその研究成果を生かすことができ、かつそれぞれの研究・プロジェクトごとに新しい研究課題を発見することができた。

2. 展示予定

- (1) 『『もの』からみる近世』『絵図・地図にみる近世』のコーナーでは、それぞれ年5、6回のペースで特集展示を実施することで、資源の活用をはかるとともに、新しい研究成果を速報的に発信する。
- (2) 平成24年度「行列からみえる近世社会（仮題）」という企画展示を予定している。

3. 新たな資料収集（新しい資源）

- (1) 第3展示室関連資料の収集 これまでのコレクションの充実
- (2) 海外にある近世日本関係史料のデジタル撮影による収集と共有資源化の推進

研究のなかで、シーボルトが、日本で聞いた旋律を書き留め、帰国後作曲しようとしていたことがわかり、第3展示室では、彼が作曲した「日本のメロディ」を再現して来館者に聞かせるという展示上での工夫をした。この楽譜は、子孫の家に残っているが、これ以外にも新発見の史料があることが確認できた。この子孫宅のシーボルト（父子）関係史料のデジタル撮影を計画的に進め、所蔵者の許可を得て新しい「資源」として活用できるようにしたいと考えている。

文献史学・考古学と自然科学との学際的共同研究により、炭素14年代測定などによって得られた実年代に基づいて歴史像を考えていく学問分野のことである。

日本に古代国家が成立する以前の先史時代の場合は、土器型式が時間軸の基礎資料となっているので、土器型式ごとに実年代を与えることが出来れば、ほとんどの遺跡、遺構、遺物の実年代を求めることが出来る。

また古代国家成立以降であっても土器さえあれば北海道や沖縄でも適用できるので、遺跡や遺物の実年代をもとに歴史像を構築することが可能である。

では歴博の年代歴史学研究はどのようにして始まり現在へと至っているのか、その歴史と成果をご紹介します。

1. 研究統合の流れ

年代歴史学研究は以下に述べる三つの研究が統合されたものである。まず日本・韓国・中国・ロシアなどの研究機関が所蔵する縄文～古墳、およびその併行期の土器に付着した炭化物や木炭、漆などの炭素14年代測定用試料を収集し、歴博で前処理後、炭素14年代測定を外部に依頼し、その結果を受けて校正年代を求めるといった資料調査部分。測定値をふまえて新しい年代軸を構築し、それに基づき日本の古代史像を再構築する研究部分。新しい古代史像を出版物や展示として社会や市民に直接公開する部分である。

すでに2003年以降、資源（資料調査）→研究→公開というサイクルを幾度となく実践してきているため、その意味で館蔵のモノ資料の調査・解析をもとに歴史や文化の復元を行い、成果を公開するというスタイルとは趣を異にするが、鉛同位体比分析に基づく青銅器の産地推定研究などともに、歴博の高精度歴史情報研究に属する基盤

研究の一角をなす。

2. 研究の経緯と公開、対外的効果

本研究は大型の科学研究費等による外部資金と歴博の基盤経費とを組み合わせることによって、佐原真副館長の時代（1997年）に始まった。90年代後半の基礎的方法論の開拓、2000年前後の縄文時代を対象とした年代軸の構築、2003年以降の弥生時代を対象とした年代軸の構築をへて現在に至っている。ほぼ15年、2万点以上の試料を収集し、炭素14年代測定や同位体分析を中心とするさまざまな調査・研究をおこなってきた。

得られた研究成果は学界はもちろん、大小8つの企画展示や特別展示、プロムナード展示、6冊の一般向け単行本、NHKによる特別番組の放映、74件の新聞報道を通じて、速やかに、広く社会や市民に還元され、その成果は今や中学校の教科書に取り上げられるまでに至っている。

【資源】

1. 研究資料の特色

本研究の資料の特色は、炭素14年代測定の対象となる測定試料にある。特に縄文土器や弥生土器に付着した炭化物やウルシ、木材を対象としている点に特色がある。

土器付着炭化物を中心とした試料は、日本考古学が相対編年の基準としている土器に付着したものだけに、土器との同時性を疑いようのないもっとも確実な試料である。それまで測定試料の中心であった木炭は測定試料としての優位性は高いものの、出土層のかく乱などによる時期の帰属問題や古材の再利用ではないのかという見きわめが難しく、古木効果の可能性が疑われるなどの問題があって考古学的な時期の確実さという意味で土器付着炭化物には及ばない。

土器に付着した炭化物には調理の際に薪から出て土器表面にくっついたススや、コメやドングリが焦げて土器の内

面にくっついた煮焦げ、それらの吹きこぼれなどがある。

また土器に塗られたウルシなど、もっとも優れた試料の一つである。さらに年輪年代のわかっている木の炭素14年代を測り、日本独自の校正曲線の整備をすすめている。

2. 収集資料の調査とマニュアル化

① 考古学的調査

資料は、土器型式の認定、炭化物付着部位の記録、炭化物採取、炭化物の肉眼観察（スス、煮焦げ、吹きこぼれ）、写真撮影などをへて年代測定資料実験室に持ち込まれる。

② 試料調製

土器付着炭化物の試料調製は、縄文土器に付着した炭化物約700点を前処理していく中で2000年前後に確立した方法に基づきおこなわれる。

土器付着炭化物は、何千年にもわたる埋蔵中に土中に



炭化物の付着した土器（福岡市橋本一丁田遺跡出土土器：福岡市埋蔵文化財センター所蔵）



ウルシ（韓国靑島遺跡出土土器塗布漆：釜山大学校博物館所蔵）



年輪年代の判明した木材（東広島市黄幡1号遺跡ヒノキ材：東広島市埋蔵文化財センター提供）

含まれるいろいろな不純物を取りこんでしまうので、それらを化学処理によって除去するための方法論を構築して手順をマニュアル化している。

③ 測定

調製がすんだ試料は東京大学や名古屋大学、民間の測定機関に送られて炭素14年代測定がおこなわれる。

3. 成果の公開

測定機関から報告された炭素14年代と較正年代は以下の文献によって公開されている。

- ① 平成9～11年度科学研究費補助金・基盤研究（A）

（1）研究成果報告書 佐原真編『ヒノキ・スギ等の年輪年代による炭素14年代の修正』2005年4月、国立歴史民俗博物館

- ② 平成13～15年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書 今村峯雄編『縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築』2004年3月 国立歴史民俗博物館

- ③ 平成16～20年度文部科学省・科学研究費補助金学術創成研究費 西本豊弘編『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』研究成果報告書、2009年3月、国立歴史民俗博物館。

【研究】

共同研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（平成15～17年度）

共同研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」（平成18～20年度）

1. 研究の目的

測定値をもとに土器型式ごとの実年代を求め、土器編年に年代を与えることで先史時代の時間軸を構築し、それをもとに新しい古代史像を構築する。

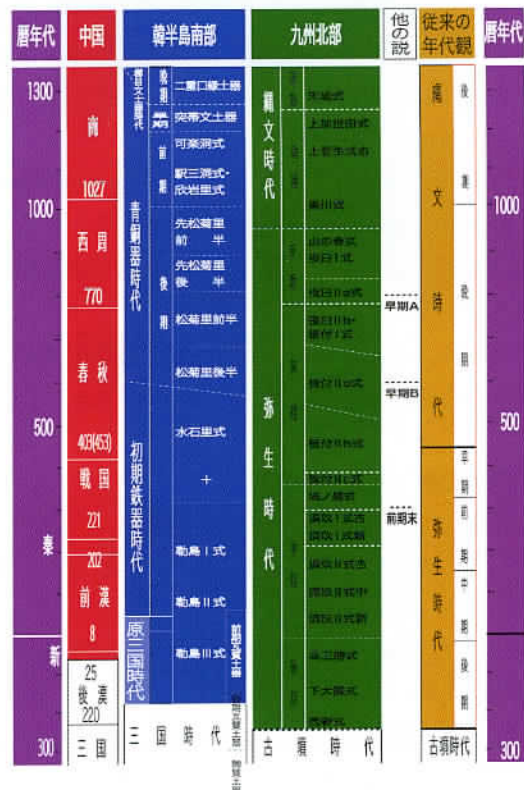
2. 研究の成果

① 日本版較正曲線の整備

奈良文化財研究所の光谷拓実氏によって年輪年代が測定された遺跡出土のスギを、5年輪ごとに炭素14年代測定して、紀元前10世紀から紀元後500年までの日本版較正曲線の構築に取り組み始めた。その結果、世界的な較正曲線であるIntCal04では難しかった、水田稲作が西日本に広がり始める時期と、前方後円墳がつくられ始める時期を求められるようになった。

② 土器型式の実年代を求める方法の開拓

土器型式ごとの出現年代を統計的に求める方法を開発して土器型式の存続幅を導きだすことができた。その結果、これまで均等と仮定してきた土器型式の存続幅は、もっとも短い前期末の30年からもっとも長い須玖Ⅱ式の200年までバラバラであることを初めて明らかにした。



炭素14年代にもとづく年表

まさに世界に冠たる高精度の土器編年網を構築している日本先史考古学だからこそ開拓できたといえよう。

③ 考古学的な成果

縄文、弥生、古墳の各時代で、土器、水田稲作、前方後円墳、須恵器の開始年代が遡ることを明らかにした。

縄文 日本列島における土器の出現が1万5千5百年前までさかのぼることがわかった。

弥生 日本列島で水田稲作が始まった時期が約500年さかのぼって前10世紀後半に、また中期は約200年さかのぼって前4世紀後半になることを明らかにした。

古墳 古墳時代の始まりを意味する奈良県箸墓古墳は、西暦3世紀中頃には造られ始めていた可能性を自然科学的につきとめた。また須恵器が紀元後4世紀末まで遡る可能性が出てきた。

④ 古代史像の再構築

以上、4つの時代の開始年代が古くなることは次のような新しい課題を生み出すことになる。

縄文 土器が氷期に出現したことになり、温暖化に伴う新たな食料加工技術のために土器が出現したという従来の説を全面的に見直さなければならなくなった。

- 弥生 水田稲作の開始年代が約500年さかのぼると、
- ・「稲と鉄」の時代と考えられてきた弥生時代のうち前半の約600年は金属器がない、「稲と石」の時代であったことになる。
 - ・九州北部で水田稲作が始まってから関東南部で水田稲作が始まるまでの約800年間は、生業を異にする人びとが本州島上に並存していたという、異文化並存状態であったことになる。
 - ・水田稲作の開始以来わずか700年で前方後円墳を造り西暦7世紀に古代国家を成立させるという、急速な古代化を達成したという日本古代史像は、見直しを迫られている。

このように、これまでの古代史像に大きな転換を迫ることになったことは間違いない。

3. 成果の公表・社会への波及

① 出版物

雄山閣 西本豊弘ほか編『新弥生時代の始まり』1～4巻、2006・2007・2008・2009年

学生社 春成秀爾・今村峯雄編『弥生時代の実年代』2004年6月

雄山閣 西本豊弘編『季刊考古学』第88号、2004年8月
学生社 広瀬和雄編『歴博フォーラム 弥生時代はどう変わるか』2007年3月



今村峯雄編『高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第137集、2007年

中学校歴史教科書 東京書籍2009年版『新編新しい社会歴史』2009年2月

月刊リベラル・タイム第3巻8号 藤尾慎一郎「弥生時代は紀元前10世紀になったのか？」2003年8月

学習研究社 藤尾慎一郎「概説Ⅲ：弥生時代」2008年3月
学術創成研究 ニュースレターNo.1～No.11

② テレビ・ラジオ

NHK「クローズアップ現代」『弥生時代がさかのぼる』2003年7月7日放映

NHK「サイエンスZERO」第43回最新科学で考古学のなぞにせまる 2004年5月5日放映

NHKワールドラジオ日本『Japan and World 44 minutes』放送出演 2003年6月10日

テレビ朝日「報道ステーション」2009年5月28日放映

③ 新聞報道

平成16年度 朝日新聞他14件、平成17年度 朝日新聞他14件、平成18年度 朝日新聞他11件、平成19年度 朝日新聞他25件、平成20年度 朝日新聞他10件

④ シンポジウム

・2004年12月25～26日 歴博国際シンポジウム2004「弥生農耕の起源と東アジア」国立歴史民俗博物館

・2006年3月4日 第53回歴博フォーラム「弥生の始まりと東アジア」ヤマハホール

・2006年12月1日～3日 歴博国際シンポジウム2006「古代東アジアの青銅器文化と社会一起源・年代・系譜・流通・儀礼」国立歴史民俗博物館

・2007年1月20日 第58回歴博フォーラム「縄文時代のはじまりー愛媛県上黒岩遺跡の研究成果ー」国立歴史民俗博物館

【展示】

- 🌀 特別展「縄文 V.S. 弥生」(2005年7月16日～8月31日) 国立科学博物館と共催(展示代表者 藤尾慎一郎)
- 🌀 企画展示「弥生はいつから!?—年代研究の最前線—」(2007年7月3日～9月2日)(展示代表者 今村峯雄)
- 🌀 企画展示「縄文はいつから!?—1万5千年前になにがおこったのか—」(2009年10月14日～2010年1月24日) 花巻市博物館と共催(展示代表者 小林謙一)

大小8つの展示を開催してきた。ここでは弥生時代に關する主な展示として「弥生はいつから!?」を報告する。

1. 展示の趣旨

歴博が進めてきた年代測定研究によって大きく変わってきた縄文・弥生時代の年代がどのように求められてきたのか、具体的な方法を体験し、具体的な資料を実際に見てもらおう。九州北部、近畿、東北を中心に、弥生時代の水稻農耕の始まりと日本の各地への広がりについて、その時代の東アジア情勢とも関連させつつ、最新の弥生時代像を知ってもらうことができる。

2. 展示の効果

① 研究成果の社会への発信としての効果

2003年5月に発表した、弥生時代前10世紀開始説の根拠となった資料(土器・木製品・漆など)を一室に会しての展示で、市民の大きな関心をよんだ。

② 社会への波及・メディアの報道等

2007年8月17日 読売新聞「歴史観問い直す「弥生はいつから」展」

2007年7月4日 千葉日報「最新の弥生像紹介」

2007年8月 千葉日報「弥生はいつから!?」連載11回

③ 新たな研究課題の発見

九州北部の地元の土器と朝鮮無文土器との関係の中から創造されたと考えられてきた弥生土器の壺の文様や形態に、東北地方の大洞式土器の影響が見られるという衝撃的な研究論文が、展示開設直前に発表されたが、その根拠となった資料も出展されていた。そこで論文を執筆したご本人に、資料の説明と論拠を展示場にて資料を目の前に説明してもらった。

展示という関連資料が一室に会する場で研究会を開催することで、展示と共同研究のコラボによる新たな研究課題が生まれる可能性がある。

3. その他の展示

- ・歴史を探るサイエンス 2003年10月21日～11月30日
- ・水辺と森と縄文人—低湿地遺跡の考古学— 2005年6月14日～7月31日 主催 国立歴史民俗博物館・東北歴史博物館・新潟県立歴史博物館
- ・歴博プロムナード展示「房総発掘ものがたり」2006年3月9日～3月21日 主催 (財)千葉県文化財センター
- ・歴博プロムナード展示「縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—」2007年1月17日～2月25日 国立歴史民俗博物館



企画展示ポスター

【新展開】

- 🌀 共同研究「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」(平成21～23年度)(研究代表者 藤尾慎一郎)(新しい古代像樹立のための総合的研究)
- 🌀 共同研究「歴史・考古資料研究における高精度年代論」(平成21～23年度)(研究代表者 坂本稔)

平成21年度から始まった歴博の基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」(研究総括代表者 藤尾慎一郎)(平成21～23年度)によって再構築された新しい古代

史像にのっとった展示を、共同研究報告書刊行後に総合展示第1室で開きたいと考えている。

映像制作による民俗研究と映像資料の保存・公開

地域社会や家族観の変容、消費経済の進展に伴い、現代の民俗文化は刻々と変容を遂げている。本館は、民俗のこのような動態を映像によって記録し、研究資料として保存・活用に供しているほか、映像フォーラムを開催して成果を広く一般に公開している。

【資源】

🌀 民俗研究映像の制作（昭和63年度～継続）

🌀 映像資料の保存・公開（平成18年度～継続）

1. 資料収集の概要

時代とともに変化を遂げる民俗文化や、口頭伝承、技術伝承、儀礼、芸能など、身体を通して伝承されてきた民俗文化にとって、映像はもっとも適した記録方法と考えられる。本館では、民俗の研究資料として収集・公開することを目的として、昭和63年度から毎年1作品ずつ、「民俗研究映像」を制作している。研究者が、撮影対象についての研究成果をふまえて映像制作に直接携わり、プロデューサーや監督の役割を果たして制作するもので、①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であり、研究成果の発表の手段としての映像による論文である、という原則に基づいて制作されている。

2. 収集の経緯

本館が民俗研究映像の制作を開始する4年前より、本館は文化庁の協力で「民俗文化財映像資料」の制作をおこなっていた。「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」リストから撮影対象が選ばれ、映像製作会社が30分程度の作品に仕上げる。これは主として教育・普及用の映像であり、演出が入るなどして現代のありのままの民俗文化の記録とは言えない内容であったり、各カットが短く編集されるために、身体技術や儀礼過程の研究にたえる内

容とは言えないという欠点があった。その反省から、研究者の視点での映像制作が民俗の研究に必要であるとされ、民俗研究映像の制作が開始された。

3. 収集資料の特色

研究テーマに応じてまとめられる完成作品は、概ね45分～120分であるが、撮影素材は1作品につき100時間を超える場合もある。それら未編集の映像は、高齢化、過疎化、観光開発などによって急速に変容を遂げる現代の民俗についての、唯一無二の、二度と撮影できない貴重な記録であり、現代と将来の民俗研究の資料として提供するべく、本館において収蔵し、保存している。

4. 資料調査の概要と意義

制作された映像記録によって、民俗の変容や、行事のプロセス、物づくりの諸行程などの動態分析が可能となり、撮影対象についての専門的な研究に役立てられている。

5. 成果の公開

平成18年度より「歴博映像フォーラム」を開催し、完成作品を広く一般に公開するほか、平成19年度より、DVD化や著作権等の権利関係の整理が済んだ作品から、研究資料としての貸し出しを開始している。



撮影素材テープ



AINU Past and Present 撮影風景（平成17年度）



現代の葬送儀礼 撮影風景（平成16年度）

【研究】

共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(平成16～18年度)(研究代表者 内田順子)

共同研究「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(平成19～21年度)(研究代表者 青木隆浩)

1. 目的

昭和63年度よりはじまった「民俗研究映像」の制作は、おもに民俗研究部(当時)の担当教員が自ら監督となって企画立案、撮影、編集をおこなうものであり、映像を用いて民俗研究の成果を発表する手段として位置づけている。ただし、平成15年度まではこれに関して研究会を組織しておらず、様々なノウハウが蓄積されにくい状況であり、保存・活用方法も定まっていなかった。

そこで平成16年度からは、「民俗研究映像」の制作を共同研究の1課題に組み込み、「民俗研究映像の資料論的研究」(～18年度)を立ち上げた。ここでは、民俗(族)誌映画制作の現状を把握するとともに、映像アーカイブスの事例を収集し、制作準備から制作、保存、活用に至るまでのガイドラインを作成することを目的とした。また、館外や他研究系の研究者、プロの映画監督を交えて映像論の研究会をおこなうこととした。

その結果、おおよそのガイドラインを作成し、かつ制作した映像を再分析・再活用する道筋をつくることができたが、権利関係の処理や過去の作品の劣化、映像素材の保存については課題が残った。そこで、平成19年度からは「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(～21年度)を立ち上げ、これらの課題に取り組むとともに、ガイドラインのさらなる改善をすることにした。また、この共同研究会では、民俗学とその隣接分野、映像人類学といった学術的な視点から、作品分析をおこなうこととなった。

2. 研究の成果

(1)「民俗研究映像の資料論的研究」(平成16年度～18年度)

・映像制作

平成16年度「現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業—長野県飯田下伊那地方」(45分)、「現代の葬送儀礼 都市近郊における斎場での葬儀—飯田市佐々木家」(45分)、「現代の葬送儀礼 村落における公共施設での葬儀—下條村宮嶋家」(45分)、「現代の葬送儀礼 葬儀用品問屋と情報」(45分)、担当：山田慎也

これは、家族観の変化や地域社会の解体などにより、葬送儀礼が大きく変容している中で、檀家と地域社会、葬祭業者を中心に現代の葬儀の動態を記録した映像である。

平成17年度「AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの」(102分)、担当：内田順子

これは、マンローによって撮影された熊送り儀礼のフィルムがたどった歴史を明らかにするとともに、彼の残したアイヌ文化についての記録が、現在のアイヌ民族とその文化伝承にとってどのような意味を持つのか考察したものである。

平成18年度「興福寺 春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」(71分)、「薬師寺花会式～行法と支える人々」(71分)、担当：松尾恒一

これは、奈良の興福寺、春日大社、薬師寺を中心として、寺社の年中行事と、普段あまり取り上げられることのないこれを補佐する人々の役割を記録したものである。

・再編集：英語版・日本語短縮版「AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの」

(2)「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(平成19年度～21年度)

・映像制作

平成19年度「伝統鴨網猟と人々の関わり—加賀市片野鴨池の坂網猟」(35分)、「加賀市片野鴨池の坂網猟」(5分)、担当：安室知

ここでは、小さな網で飛来するカモを捕らえる猟法とその背景にある自然環境への民俗知識をテーマにしている。

平成20年度「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」(52分)、「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」[列伝篇](99分)、担当：小池淳一

これは、万年筆を生み出す人々、流通に携わる人々、されにそれを購入し、あるいは贈られて様々な場面で使う人々を広く捉えようとしたものである。

平成21年度「平成の酒造り 製造編」、「平成の酒造り 継承・革新編」、担当：青木隆浩



これは、季節出稼ぎの杜氏集団が激減する中、地元の若い従業員が出稼ぎの杜氏集団とともに、あるいは彼らだけで酒造りの技術を学び、製造している様子を記録したものである。

- ・再編集：英語版「興福寺 春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」、「薬師寺花会式～行法と支える人々」、「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－〔本篇〕」、「筆

記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－〔列伝篇〕」

- ・素材テープのデジタルアーカイブ化：昭和63年度制作「芋くらべ祭りの村－近江中山民俗誌－」、平成元年度制作「鹿島様の村－秋田県湯沢市岩崎民俗誌－」、平成2年度制作「椎葉民俗音楽誌 1990」、平成6年度制作「遠野民俗誌94/95」、平成7年度制作「沖縄・糸満の門中行事」、平成8年度制作「芸北神楽民俗誌」など

【公開】

🌀 歴博映像フォーラム（平成18年度～継続）

🌀 民俗研究映像の貸出業務（平成19年度～継続）

1. 趣旨

本館制作の民俗研究映像をひろく公開するとともに、現代の民俗の様相について、映像をもとに、その分野の専門家と討論を交えて考察する場として、平成18年度より「歴博映像フォーラム」を開催している。

また、民俗研究映像の制作を開始した昭和63年度以降、撮影や完成品のビデオフォーマットが変化してきたほか、著作権や肖像権についての一般の関心も高まってきた。平成16年度からスタートした民俗研究映像の共同研究において、映像資料の保存に適したフォーマットの検討や権利関係の整理を進め、過去の作品の保存措置とDVD化をはかり、平成19年度より研究・教育機関、研究者を対象に完成作品の貸出業務を開始した。

2. 効果

① 歴博映像フォーラム

ふだん対象化して見る機会の少ない儀礼や技術伝承などを映像を通して見るだけでなく、その分野の専門家の討論が加わることで、一般の方からその分野の関係者まで、広い関心を集め、毎回、多くの方々が参加し、好評を得ている。

平成18年度「現代の葬送儀礼」（津田ホール、参加人数356人）

平成19年度「映像をめぐる虚と実 AINU: Past and Present」（新宿明治安田生命ホール、参加人数265人）

平成20年度「海を渡った仏教 儀礼と芸能」（新宿明治安田生命ホール、参加人数306人）

平成21年度「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－」（新宿明治安田生命ホール、参加人数171人）

② 民俗研究映像の貸出業務

個人の研究者、大学での授業、シンポジウム、学術映像祭等に貸出がおこなわれている（http://www.rekihaku.ac.jp/research/material/lending_dvd.html）。



「歴博映像フォーラム」第1回～第4回のパンフレット



「歴博映像フォーラム4」のチラシ

【新展開】

平成17年度に制作した「AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの」は、本館が所蔵する古い映画フィルムの資料批判的研究の成果をまとめたものであるが、これをきっかけとして、スコットランド出身の医師であり、考古学やアイヌ文化の研究でも業績のあるニール・ゴードン・マンローが撮影した写真・映画を所蔵する機関（本館、北海道開拓記念館、下中記念財団、英国王立人類学協会、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、国立スコットランド博物館）が協力して行う国際的なデジタル化の共同研究に発展するなど、

資料を所蔵し研究する博物館としての特色が活かされた例となっている。

また同作品では英語版を制作し、英国王立人類学協会主催の第10回国際民族誌映画祭（2007年6月27日）のほか、映像人類学モスクワ国際映画祭（2008年10月2日）で上映され、高い評価を得た。この作品以降は、英語版の制作も共同研究において行うこととし、日本の民俗文化の研究成果を海外へ向けて発信するという課題に取り組んでいる。

民俗研究映像一覧表

制作年	題 名	制作担当者	規 格
1988-1989	芋くらべ祭の村ー近江中山民俗誌ー	上野和男・岩本通弥・橋本裕之	16ミリ・カラー・日本語・100分
1989-1990	鹿島様の村ー秋田県湯沢市岩崎民俗誌ー	岩井宏實	16ミリ・カラー・日本語・59分
1990-1991	椎葉民俗音楽誌 1990	小島美子	16ミリ・カラー・日本語・120分
1991-1992	都市に生きる人々ー金沢七連区民俗誌（Ⅰ）ー	小林忠雄・菅豊	16ミリ・カラー・日本語・70分
	技術を語るー金沢七連区民俗誌（Ⅱ）ー		16ミリ・カラー・日本語・45分
1992-1993	黒島民俗誌ー島譜のなかの神々ー	篠原徹・菅豊	16ミリ・カラー・日本語・60分
	黒島民俗誌ー牛と海の賦ー		16ミリ・カラー・日本語・60分
1993-1994	景観の民俗誌ー東のムラ・西のムラー	福田アジオ・篠原徹・菅豊	16ミリ・カラー・日本語・120分
1994-1995	観光と民俗文化ー遠野民俗誌94/95ー	川森博司	16ミリ・カラー・日本語・45分
	民俗文化の自己表現ー遠野民俗誌94/95ー		16ミリ・カラー・日本語・45分
	遠野の語りべたち		16ミリ・カラー・日本語・29分
1995-1996	沖縄・糸満の門中行事ー神年頭と門開きー	比嘉政夫	16ミリ・カラー・日本語・110分
1996-1997	芸北神楽民俗誌 第1部 伝承	新谷尚紀	16ミリ・カラー・日本語・45分
	芸北神楽民俗誌 第2部 創造		16ミリ・カラー・日本語・48分
	芸北神楽民俗誌 第3部 花		16ミリ・カラー・日本語・29分
1997-1998	風の盆ふーりんぐー越中八尾マチ場民俗誌ー	小林忠雄	16ミリ・カラー・日本語・90分
1998-1999	大柳生民俗誌 第1部 宮座と長老	新谷尚紀・関沢まゆみ	16ミリ・カラー・日本語・70分
	大柳生民俗誌 第2部 両墓制と盆行事		16ミリ・カラー・日本語・36分
1999-2000	沖縄の焼物ー伝統の現在	松井健・篠原徹	16ミリ・カラー・日本語・90分
2000-2001	風流のまつり 長崎くんち	福原敏男・久留島浩・植木行宣	16ミリ・カラー・日本語・93分
2001-2002	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二・内田順子	DVD/VHS・カラー・日本語・90分
2002-2003	物部の民俗といざなぎ流御祈祷	松尾恒一・常光徹	DVD/VHS・カラー・日本語・83分
2003-2004	出雲の神々とまつり 第一部 美保神社	関沢まゆみ・新谷尚紀	DVD/VHS・カラー・日本語・52分
	出雲の神々とまつり 第二部 佐太神社		DVD/VHS・カラー・日本語・45分
	出雲の神々とまつり 第三部 荒神祭り		DVD/VHS・カラー・日本語・15分
2004-2005	現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業ー長野県飯田下伊那地方	山田慎也	DVD/VHS・カラー・日本語・45分
	現代の葬送儀礼 都市近郊における斎場での葬儀ー飯田市佐々木家		DVD/VHS・カラー・日本語・45分
	現代の葬送儀礼 村落における公共施設での葬儀ー下條村宮嶋家		DVD/VHS・カラー・日本語・45分
	現代の葬送儀礼 葬儀用品問屋と情報		DVD/VHS・カラー・日本語・45分
2005-2006	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子	DVD/VHS・カラー・日本語・102分
2006-2007	興福寺 春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～	松尾恒一	DVD/VHS・カラー・日本語・71分
	薬師寺花会式～行法と支える人々～		DVD/VHS・カラー・日本語・71分
2007-2008	伝統鴨網猟と人々の関わりー加賀市片野鴨池の坂網猟	安室知	DVD/VHS・カラー・日本語・35分
	加賀市片野鴨池の坂網猟		DVD/VHS・カラー・日本語・5分
2008-2009	筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びと [本編]	小池淳一	DVD/VHS・カラー・日本語・52分
	筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びと [列伝編]		DVD/VHS・カラー・日本語・99分
2009-2010	平成の酒造り 製造編	青木隆浩	
	平成の酒造り 継承・革新編		

参 考 編

紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究と公開

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	タイトル	代表者
共同研究							■				基盤研究「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」	高桑いづみ
研究報告										■	「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」	
資料調査プロジェクト	■	■	■								紀州徳川家伝来楽器の調査	日高 薫
資料図録				■							『紀州徳川家伝来楽器コレクション』	
データベース				■	■						データベース作成経費 人間文化研究機構総合推進事業「研究資源共有化における 歴博データベースの拡充 データベースれきはく「紀州徳川家伝来楽器」	日高 薫
展示プロジェクト研究				■	■						特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」展示プロジェクト	日高 薫
展 示					■			■			特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」(2005.8.13～9.19) 総合展示第3展示室「ものから見る近世」ミニ企画展示 「紀州徳川家伝来の楽器一笠一」(平成20.10.17～12.7)	日高 薫

【研究組織】

資料調査プロジェクト「紀州徳川家伝来楽器の調査」

平成13～15年度 (代表者 日高 薫)

- ◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系
- 水野 僚子 本館リサーチアシスタント
- 小島 美子 本館名誉教授
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系
- 丸山 伸彦 本館研究部情報資料研究系
- 澤田 和人 本館研究部情報資料研究系
- 小代 涉 学識経験者
- 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系

基盤研究「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」

平成18～20年度 (研究代表者 高桑いづみ)

- 遠藤 徹 東京学芸大学教育学部
- 小代 涉 学識経験者
- 薦田 治子 武蔵野音楽大学音楽学部
- 清水 淑子 学識経験者
- 高橋 美都 同志社大学文化情報学部
- 中里 壽克 学識経験者
- 野川美穂子 東京芸術大学
- 能代 修一 森林総合研究所
- 水野 僚子 大分県立芸術文化短期大学
- ◎高桑いづみ 東京文化財研究所 (本館客員教授)
- 永嶋 正春 本館研究部情報資料研究系
- 日高 薫 本館研究部情報資料研究系
- 宮田 公佳 本館研究部情報資料研究系
- 久留島 浩 本館研究部歴史研究系
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系

特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」展示プロジェクト委員 平成16～17年度 (展示代表者 日高 薫)

- ◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系
- 水野 僚子 日本学術振興会特別研究員 (本館研究部情報資料研究系外来研究員)

総合展示第3展示室「ものから見る近世」ミニ企画展示「紀州徳川家伝来の楽器一笠一」展示プロジェクト委員

平成20年度 (展示代表者 日高 薫)

- 内田 順子 本館研究部民俗研究系
- ◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系
- [展示協力者]
- 遠藤 徹 東京学芸大学教育学部

総合展示第3展示室「ものから見る近世」特集展示「紀州徳川家伝来の楽器一琵琶一」展示プロジェクト委員

平成21～22年度 (展示代表者 日高 薫)

- 内田 順子 本館研究部民俗研究系
- ◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系
- [展示協力者]
- 薦田 治子 武蔵野音楽大学音楽学部

企画展示「楽器をめぐる風景 (仮)」展示プロジェクト委員 平成22年～24年度 (展示代表者 日高 薫)

- 遠藤 徹 東京学芸大学教育学部
- 加藤富美子 東京学芸大学教育学部
- 清水 淑子 学識経験者
- 高瀬 澄子 沖縄県立芸術大学
- 水野 僚子 大分県立芸術文化短期大学
- 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系
- 久留島 浩 本館研究部歴史研究系
- 鈴木 卓治 本館研究部情報資料研究系
- 永嶋 正春 本館研究部情報資料研究系
- ◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系

「高松宮家伝来禁裏本」の調査研究と公開

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	タイトル	代表者
共同研究								基盤研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」	吉岡 眞之
								基盤研究「高松宮家伝来禁裏本の総合的研究」	吉岡 眞之
								人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の文庫と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として－」	吉岡 眞之
研究報告					■			『人間文化研究機構連携研究「文化資源の高度活用」 中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として－ 研究調査報告書1』	
						■		『人間文化研究機構連携研究「文化資源の高度活用」 中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として－ 研究調査報告書2』	
資料調査プロジェクト							■	『禁裏本と古典学』（塙書房）	
データベース								人間文化研究機構総合推進事業「研究資源共有化における歴博データベースの拡充」	
資料目録						■		『高松宮家伝来禁裏本目録【分類目録編】』	
						■		『高松宮家伝来禁裏本目録【奥書刊記集成・解説編】』	
展示プロジェクト研究								人間文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」展示プロジェクト	
展示			■					人間文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」（2005.10.18～11.27）	
資料図録			■					展示図録『うたのちから－和歌の時代史－』	
フォーラム			■					歴博・国文研共同フォーラム「和歌と貴族の世界」（2005.11.3）	
フォーラム記録				■				国立歴史民俗博物館フォーラム記録『和歌と貴族の世界 うたのちから』（塙書房）	

【研究組織】

基盤研究『高松宮家伝来禁裏本』の基礎研究

平成15～18年度（研究代表者 吉岡 眞之）

石田 実洋	宮内庁書陵部
小川 剛生	国文学研究資料館
小倉 慈司	宮内庁書陵部
杉本まゆ子	宮内庁書陵部
相馬万里子	元宮内庁書陵部
田島 公	東京大学史料編纂所
高橋 智	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
酒井 茂幸	日本学術振興会特別研究員（本館外来研究員）
井原今朝男	本館研究部歴史研究系
○高橋 一樹	本館研究部歴史研究系
松尾 恒一	本館研究部民俗研究系
◎吉岡 眞之	本館研究部歴史研究系

人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として」

平成17～20年度（研究代表者 吉岡 眞之）

石田 実洋	宮内庁書陵部
内田 濤子	東京大学史料編纂所
海野 圭介	ノートルダム清心女子大学
大内 瑞恵	都留文科大学
小川 剛生	国文学研究資料館
小倉 慈司	宮内庁書陵部
小倉真紀子	日本学術振興会
小倉 嘉夫	大阪青山短期大学
久保木秀夫	国文学研究資料館
盛田 帝子	相愛大学
酒井 茂幸	日本学術振興会特別研究員
井原今朝男	本館研究部歴史研究系
◎吉岡 眞之	本館研究部歴史研究系

基盤研究『高松宮家伝来禁裏本』の総合的研究

平成19～21年度（研究代表者 吉岡 眞之）

大内 瑞恵	都留文科大学
小川 剛生	国文学研究資料館
小倉真紀子	日本学術振興会特別研究員
久保木秀夫	国文学研究資料館
高橋 智	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
酒井 茂幸	日本学術振興会特別研究員（本館外来研究員）
井原今朝男	本館研究部歴史研究系
高橋 一樹	本館研究部歴史研究系
松尾 恒一	本館研究部民俗研究系
◎吉岡 眞之	本館研究部歴史研究系

人間文化研究機構連携展示「うたのちから」展示プロジェクト委員 平成15～17年度（展示代表者 吉岡 眞之）

浅田 徹	お茶の水女子大学文教育学部
小川 剛生	国文学研究資料館
加藤 昌嘉	国文学研究資料館
平野由紀子	お茶の水女子大学大学院
酒井 茂幸	日本学術振興会特別研究員
井原今朝男	本館研究部歴史研究系
大久保純一	本館研究部情報資料研究系
澤田 和人	本館研究部情報資料研究系
○仁藤 敦史	本館研究部歴史研究系
日高 薫	本館研究部情報資料研究系
◎吉岡 眞之	本館研究部歴史研究系

洛中洛外図屏風の調査研究と公開

	2005	2006	2007	2008	2009	タイトル	代表者
共同研究					■	共同研究「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」	小島 道裕
科学研究費					■	人間文化研究機構連携展示準備研究「洛中洛外図屏風と風俗画、そして地誌（仮題）」	小島 道裕
展示プロジェクト研究		■			■	「西のみやこ 東のみやこー描かれた中近世都市ー」展示プロジェクト 企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画（仮題）」展示プロジェクト	大久保純一 小島 道裕
展 示			■			企画展示「西のみやこ 東のみやこー描かれた中近世都市ー」（2007.3～5）	大久保純一
企画展示図録			■			『西のみやこ 東のみやこー描かれた中近世都市ー』	

【研究組織】

企画展示「西のみやこ 東のみやこー描かれた中近世都市ー」

平成18～19年度（展示代表者 大久保純一）

【展示プロジェクト委員】

安達 文夫 本館研究部情報資料研究系
 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系
 大久保純一 本館研究部情報資料研究系
 久留島 浩 本館研究部歴史研究系
 小島 道裕 本館研究部歴史研究系
 鈴木 卓治 本館研究部情報資料研究系
 高橋 一樹 本館研究部歴史研究系

【刊行物】

企画展示図録『西のみやこ 東のみやこ』2007年3月

基盤研究／科学研究費（基盤研究B）

平成21～22年度（研究代表者 小島 道裕）

「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」

【研究員】

岩崎 均史 たばこと塩の博物館
 岩永てるみ 愛知県立芸術大学
 神庭 信幸 東京国立博物館保存修復課
 佐多 芳彦 國學院大學栃木短期大学
 末柄 豊 東京大学史料編纂所
 鋤柄 俊夫 同志社大学文化情報学部
 安達 文夫 本館研究部情報資料研究系
 井原今朝男 本館研究部歴史研究系
 大久保純一 本館研究部情報資料研究系
 ◎小島 道裕 本館研究部歴史研究系
 小瀬戸恵美 本館研究部情報資料研究系
 澤田 和人 本館研究部情報資料研究系
 ○高橋 一樹 本館研究部歴史研究系
 玉井 哲雄 本館研究部情報資料研究系
 松尾 恒一 本館研究部民俗研究系
 宮田 公佳 本館研究部情報資料研究系

企画展示「洛中洛外図屏風と風俗画（仮称）」

平成21～24年度（展示代表者 小島 道裕）

【展示プロジェクト委員】

岩崎 均史 たばこと塩の博物館
 岩永てるみ 愛知県立芸術大学
 神庭 信幸 東京国立博物館保存修復課
 佐多 芳彦 國學院大學栃木短期大学
 末柄 豊 東京大学史料編纂所
 古川 元也 神奈川県立歴史博物館
 安達 文夫 本館研究部情報資料研究系
 井原今朝男 本館研究部歴史研究系
 大久保純一 本館研究部情報資料研究系
 ◎小島 道裕 本館研究部歴史研究系
 小瀬戸恵美 本館研究部情報資料研究系
 澤田 和人 本館研究部情報資料研究系
 高橋 一樹 本館研究部歴史研究系
 玉井 哲雄 本館研究部情報資料研究系
 松尾 恒一 本館研究部民俗研究系
 宮田 公佳 本館研究部情報資料研究系

総合展示第3展示室「近世」の再構築をめぐる研究

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	タイトル	代表者
共同研究		■	■	■	■					基礎研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」 基礎研究「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の資料学的研究―」 個別共同研究「博物館におけるコミュニケーション・デザインに関する研究」	久留島 浩 宮地 正人 佐藤 優香
研究報告				122集	128集	140集	■	146集		「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」 「平田国学の再検討」(一)(二)(三)	
研究プロジェクト										科学研究費「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成・歴史展示に関する総合的研究」	小島 道裕
資料調査プロジェクト	■	■	■	■	■					「『懐溜諸屑』データベース化の基礎的研究」 資料調査プロジェクト「平田篤胤関係資料の調査」	久留島 浩 宮地 正人
資料図録						■				『平田篤胤関係資料目録』	
データベース							■			「『懐溜諸屑』データベース」公開	
展示プロジェクト研究		■	■	■	■	■				「第3展示室総合展示の再構築」プロジェクト研究 特別企画「明治維新と平田国学」展示プロジェクト	久留島 浩 宮地 正人
展示			■				■	■	■	特別企画「明治維新と平田国学」(2004.10.13~12.5) 総合展示第3展示室(近世)リニューアルオープン(2009.3.18オープン) 第3展示室 ミニ企画展示「海を渡った漆器」(2008.3.18~5.18) 第3展示室 ミニ企画展示「近代医学の発祥地 佐倉順天堂」(2008.6.3~6.29) 第3展示室 ミニ企画展示「伝統の朝顔」(2008.7.29~9.7) 第3展示室 ミニ企画展示「紀州徳川家伝来の楽器 一笙一」(2008.10.7~12.7) 第3展示室 ミニ企画展示「和宮ゆかりの雛かざり」(2009.2.10~3.8) 第3展示室 ミニ企画展示「錦絵に見る江戸の料理茶屋」(2009.4.14~6.21) 第3展示室 ミニ企画展示「金箔と刺繍のきらめき―慶長小袖〜野村コレクションより〜」(2009.9.15~12.13) 第3展示室 ミニ企画展示「和宮ゆかりの雛かざり」(2009.2.9~4.4)	久留島 浩 宮地 正人 久留島 浩 日高 薫 酒井 シヅ 岩淵 令治 日高 薫 日高 薫 大久保純一 澤田 和人 日高 薫
フォーラム	■				■		■	■		「歴史系博物館の現在・未来」(2002.11) 「総合展示リニューアル(近世に向けて)Ⅰ 国際社会の中の近世日本」(2006.12.17) 「総合展示リニューアル(近世に向けて)Ⅱ 都市の時代」(2007.5.19) 「総合展示リニューアル(近世に向けて)Ⅲ ひとつもののながれ・村からみえる『近代』」(2007.10.20) 「第3展示室リニューアルオープンの成果と課題 江戸時代とは何か?」(2008.4.26)	
シンポジウム		■					■			国際シンポジウム「歴史展示を考える―民族・戦争・教育―」(2003.11) 人間文化研究機構第8回公開講演・シンポジウム「国立歴史民俗博物館第3展示室リニューアルオープン記念 新しい近世史像を求めて」(2008.6.8 東高ホール)	
シンポジウム報告書		■								『歴史展示とは何か―歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来―』 『歴史展示のメッセージ』	
報告書	■	■	■	■	■	■	■			『れきはくはいこうよ』2002~2008	

【研究組織】

館蔵資料調査プロジェクト

『『懐溜諸屑』データベース化の基礎的研究』

平成16~17年度(研究代表者 久留島 浩)

岩崎 均史 たばこと塩の博物館
 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系
 宮田 公佳 本館研究部情報資料研究系
 神田 由築 お茶の水女子大学

◎久留島 浩 本館研究部歴史研究系

第3展示室 ミニ企画展示 展示プロジェクト委員

「近代医学の発祥地 佐倉順天堂」

2008年6月3日~6月29日

佐倉市・佐倉市教育委員会・順天堂大学・日本医史学会

との共催

月澤美代子 順天堂大学医史学研究室
 土佐 博文 佐倉市市史編さん担当
 久留島 浩 本館研究部歴史研究系

◎酒井 シヅ 順天堂大学

○岩淵 令治 本館研究部歴史研究系

樋口 雄彦 本館研究部歴史研究系

「伝統の朝顔」

2008年7月29日~9月7日

◎岩淵 令治 本館研究部歴史研究系

久留島 浩 本館研究部歴史研究系

箱田 直紀 元恵泉女学園大学

平野 恵 文京ふるさと歴史館

辻 圭子 本館研究支援推進員

青木 隆浩 本館研究部民俗研究系

仁田坂英二 九州大学大学院

辻 誠一郎 東京大学大学院

「紀州徳川家伝来の楽器 一笙一」

2008年10月7日~12月7日

◎日高 薫 本館研究部情報資料研究系

内田 順子 本館研究部民俗研究系

(協力)

遠藤 徹 東京学芸大学教育学部

「和宮ゆかりの雛かざり」

2009年2月10日～2009年3月8日

澤田 和人 本館研究部情報研究系
 日高 薫 本館研究部情報資料研究系
 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系

谷本 晃久 北海道教育大学教育学部札幌校
 真栄平房昭 神戸女学院大学文学部
 谷川 章雄 早稲田大学人間科学学術院
 西坂 靖 専修大学文学部
 金行 信輔 広島大学大学院工学研究科
 福原 敏男 日本女子大学人間社会学部
 石橋 武 大阪人権博物館事業部
 桜井 邦夫 学識経験者
 原 直史 新潟大学人文学部
 白井 哲哉 さいたま文学館
 杉 仁 学識経験者
 青木 歳幸 佐賀大学地域学歴史文化研究センター
 岩橋 清美 法政大学
 神田 由築 お茶の水女子大学文教育学部
 長谷川孝治 神戸大学大学院人文研究科
 村田 孝子 ポーラ文化研究所
 鶴田 啓 東京大学史料編纂所
 菊池 勇夫 宮城学院女子大学学芸学部
 田島 佳也 神奈川大学経済学部
 横山 學 ノートルダム清心女子大学人間生活学部
 五十嵐聡美 北海道立釧路芸術院
 林 昇太郎 元北海道開拓記念館（故人）
 佐々木利和 国立民族学博物館先端人類学研究部
 岩崎奈緒子 京都大学総合博物館
 山口（旧姓 高田）みゆき

長崎市教育委員会出島復元整備室
 琉球大学
 千代田区四番町歴史民俗資料館
 順天堂大学医学部医史学研究室
 イラストレーター
 東京大学史料編纂所
 元興寺文化財研究所
 株式会社デザインコンパス

(3) 博物館学的総合研究

A 「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」

平成15～17年度（代表研究者 久島留 浩）

菊池 勇夫 宮城学院女子大学学芸学部
 島村 恭則 秋田大学教育文化学部
 豊見山和行 琉球大学教育学部
 宮坂 正英 長崎純心大学人文学部
 大久保純一 本館研究部情報資料研究系
 青山 宏夫 本館研究部歴史研究系
 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系
 ○小島 道裕 本館研究部歴史研究系
 山本 光正 本館研究部歴史研究系
 内田 順子 本館研究部民俗研究系
 竹内 有理 本館研究機関研究員
 君塚 仁彦 東京学芸大学教育学部
 鶴田 啓 東京大学史料編纂所
 並木美砂子 本館客員教員
 村上 紀夫 大阪人権博物館
 日高 薫 本館研究部情報資料研究系
 一之瀬俊也 本館研究部歴史研究系
 ◎久留島 浩 本館研究部歴史研究系
 樋口 雄彦 本館研究部歴史研究系
 藤尾慎一郎 本館研究部考古研究系
 安室 知 本館研究部民俗研究系

金城須美子
 後藤 宏樹
 酒井 シヅ
 高宮 良子
 保谷 徹
 金山 正子
 原田 泰

第三室リニューアル展示プロジェクト委員・展示協力者等

青山 宏夫 本館研究部歴史研究系
 安達 文夫 本館研究部情報資料研究系
 岩淵 令治 本館研究部歴史研究系
 内田 順子 本館研究部民俗研究系
 大久保純一 本館研究部情報資料研究系
 久留島 浩 本館研究部歴史研究系
 澤田 和人 本館研究部情報研究系
 鈴木 卓治 本館研究部情報資料研究系
 日高 薫 本館研究部情報資料研究系
 松尾 恒一 本館研究部民俗研究系
 宮田 公佳 本館研究部情報資料研究系
 安室 知 本館研究部民俗研究系
 山本 光正 本館研究部歴史研究系
 高埜 利彦 学習院大学文学部
 ロナルド＝トビ イリノイ大学歴史学部
 横田 冬彦 京都橋大学
 横山 伊徳 東京大学史料編纂所
 松井 洋子 東京大学史料編纂所
 原田 博二 長崎歴史文化研究所

基盤研究「平田国学の再検討―篤胤・鍊胤・延胤・盛胤文書の資料学的研究―」

平成15～17年度（研究代表者 宮地 正人）

遠藤 潤 国學院大學日本文化研究所
 熊澤恵里子 東京農業大学教職学術情報課程
 ◎宮地 正人 本館館長
 ○樋口 雄彦 本館研究部歴史研究系

特別企画「明治維新と平田国学」展示プロジェクト委員

平成15～16年度（展示代表者 宮地 正人）

遠藤 潤 国學院大學日本文化研究所
 川名 登 千葉経済大学
 熊澤恵里子 東京農業大学
 田崎 哲郎 愛知大学名誉教授
 ◎宮地 正人 本館館長
 ○樋口 雄彦 本館研究部歴史研究系
 新谷 尚紀 本館研究部民俗研究系

年代歴史学研究

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	タイトル	代表者
共同研究									基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」	今村 峯雄
									基盤研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」	坂本 稔
									基盤研究「歴史・考古資料研究における高精度年代論」	坂本 稔
研究報告								■137集	基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」	藤尾慎一郎
科学研究費									「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」	今村峯雄編
									基盤研究(A)(1)「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」	今村 峯雄
									学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度年代体系の構築」	西本 豊弘
資料調査プロジェクト									基盤研究(A)「日本産樹木年輪による炭素14年代の高精度校正曲線の作成」	坂本 稔
									特別展「縄文 VS. 弥生」展示プロジェクト	藤尾慎一郎
									企画展示「弥生はいつから!?—年代研究の最前線—」展示プロジェクト	今村 峯雄
展 示									企画展示「縄文はいつから!?」展示プロジェクト	小林 謙一
									特別展「縄文 VS. 弥生」(2005.7.16~8.31) 国立科学博物館と共催	藤尾慎一郎
									企画展示「弥生はいつから!?—年代研究の最前線—」(2007.7.3~9.2)	今村 峯雄
資料 図 録									企画展示「縄文はいつから!?」(2009.10.24~2010.1.24) 花巻市立博物館と共催	小林 謙一
									『縄文 VS. 弥生』(2005.7刊行)	
									『弥生はいつから!?—年代研究の最前線—』(2007.7刊行)	
フォーラム									『弥生の始まりと東アジア』(2006.3.4)	広瀬 和雄
フォーラム報告書									『弥生時代はどう変わるか—炭素14年代と新しい古代像を求めて—』(2007.3刊行、学生社)	
シンポジウム									国際シンポジウム「弥生農耕の起源と東アジア」(2004.12.25~26)	西本 豊弘

【研究組織】

資料の科学的調査および総合的年代研究

基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」平成15~17年度(研究代表者 今村 峯雄)

- 小田 寛貴 名古屋大学
- 設楽 博己 駒澤大学
- 中村 俊夫 名古屋大学
- 橋本 哲夫 新潟大学
- 松崎 浩之 東京大学大学院
- 光谷 拓実 奈良文化財研究所
- 井原今朝男 本館研究部歴史研究系
- ◎今村 峯雄 本館研究部情報資料研究系
- 坂本 稔 本館研究部情報資料研究系
- 永嶋 正春 本館研究部情報資料研究系
- 西本 豊弘 本館研究部考古研究系
- 春成 秀爾 本館研究部考古研究系
- 藤尾慎一郎 本館研究部考古研究系
- 小林 謙一 本館研究部考古研究系

[研究協力者]

- 小林 正史 北陸学院短期大学
- 中尾 七重 武蔵大学
- 村本 周三 総合研究大学院大学
- 遠部 慎 本館科研費支援研究員
- 尾寄 大真 本館科研費支援研究員
- 宮田 佳樹 本館科研費支援研究員

- 小林 謙一 本館研究部考古研究系
- 西本 豊弘 本館研究部考古研究系
- 広瀬 和雄 本館研究部考古研究系
- 藤尾慎一郎 本館研究部考古研究系

基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」(総括研究代表者 藤尾慎一郎)

「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」研究期間:平成21~23年度(研究代表者 藤尾慎一郎)

- 李 亨源 韓国・韓神大校博物館
- 野島 永 広島大学
- 安藤 広道 慶應義塾大学
- 松木 武彦 岡山大学大学院
- 小林 青樹 國學院大學栃木短期大学
- 小林 謙一 中央大学
- 吉田 広 愛媛大学ミュージアム
- 設楽 博己 駒澤大学
- 高瀬 克範 明治大学
- 岸本 直文 大阪市立大学
- 小椋 純一 京都精華大学
- ◎上野 祥史 本館研究部考古研究系
- 坂本 稔 本館研究部情報資料研究系
- 西本 豊弘 本館研究部考古研究系
- 広瀬 和雄 本館研究部考古研究系
- ◎藤尾慎一郎 本館研究部考古研究系

基盤研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」平成18~20年度(研究代表者 坂本 稔)

- 小田 寛貴 名古屋大学
- 門脇 幸恵 国立能楽堂
- 川井 秀一 京都大学
- 中尾 七重 武蔵大学
- 松崎 浩之 東京大学大学院
- 光谷 拓実 奈良文化財研究所
- 今村 峯雄 本館研究部情報資料研究系
- 齋藤 努 本館研究部情報資料研究系
- ◎坂本 稔 本館研究部情報資料研究系
- 永嶋 正春 本館研究部情報資料研究系
- 井原今朝男 本館研究部歴史研究系

基盤研究「歴史・考古資料研究における高精度年代論」(平成21年~23年度)(研究代表者 坂本 稔)

- 大河内隆之 奈良文化財研究所
- 小田 寛貴 名古屋大学
- 小林 謙一 中央大学
- 中尾 七重 武蔵大学
- 松崎 浩之 東京大学大学院
- 井原今朝男 本館研究部歴史研究系
- ◎坂本 稔 本館研究部情報資料研究系
- 西本 豊弘 本館研究部考古研究系
- 広瀬 和雄 本館研究部考古研究系
- ◎藤尾慎一郎 本館研究部考古研究系
- 永嶋 正春 本館研究部情報資料研究系

映像制作による民俗研究と映像資料の保存・公開

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	タイトル	代表者
共同研究			■	■	■	■			基盤研究「民俗研究映像の資料論的研究」 基盤研究「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」	内田 順子 青木 隆浩
民俗研究映像			■	■	■	■	■	■	『現代の葬送儀礼』 『AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの』 『興福寺春日大社～神仏習合の葬儀を支える人々』 『薬師寺花会式～行法と支える人々』 『伝統鴨網猟と人々の関わりー加賀市片野鴨池の坂網猟』 『加賀市片野鴨池の坂網猟』 『等記の近代誌』〔本編〕〔列伝編〕 『平成の酒造り』製造編, 継承・革新編 その他26頁一覧表参照	山田 慎也 内田 順子 松尾 恒一 安室 知 小池 淳一 青木 隆浩
映像フォーラム					■	■	■	■	『現代の葬送儀礼』(2007.2.3) 『映像をめぐる虚と実 AINU: Past and Present』(2007.9.15) 『海を渡った仏教 儀礼と芸能』(2008.11.29) 『等記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー』(2009.12.5)	

【研究組織】

基盤研究「民俗研究映像の資料論的研究」

平成16～18年度（研究代表者 内田 順子）

佐藤 真	京都造形芸術大学芸術学部（本館客員）
青木 隆浩	本館研究部民俗研究系
上野 和男	本館研究部民俗研究系
◎内田 順子	本館研究部民俗研究系
久留島 浩	本館研究部歴史研究系
小池 淳一	本館研究部民俗研究系
篠原 徹	本館研究部民俗研究系
新谷 尚紀	本館研究部民俗研究系
関沢まゆみ	本館研究部民俗研究系
常光 徹	本館研究部民俗研究系
松尾 恒一	本館研究部民俗研究系
宮田 公佳	本館研究部情報資料研究系
安室 知	本館研究部民俗研究系
山田 慎也	本館研究部民俗研究系

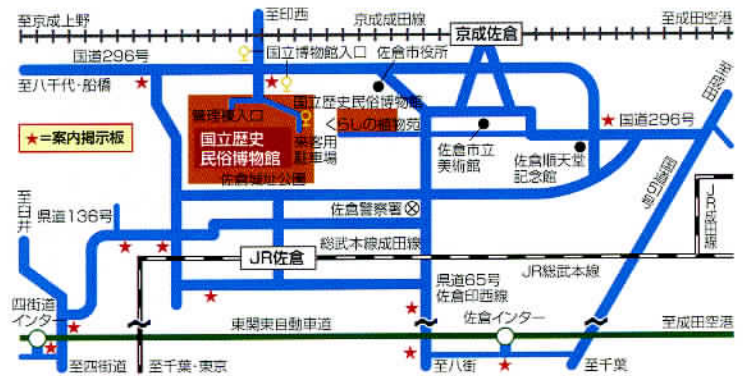
基盤研究「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」

平成19～21年度（研究代表者 青木 隆浩）

川村 清志	札幌大学文化学部
敷田 麻実	北海道大学大学院国際広報メディア研究科
篠原 徹	人間文化研究機構
安室 知	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
湯澤 規子	筑波大学大学院生命環境科学研究科
◎青木 隆浩	本館研究部民俗研究系
上野 和男	本館研究部民俗研究系
内田 順子	本館研究部民俗研究系
小池 淳一	本館研究部民俗研究系
佐藤 優香	本館研究部情報資料研究系
新谷 尚紀	本館研究部民俗研究系
関沢まゆみ	本館研究部民俗研究系
常光 徹	本館研究部民俗研究系
原山 浩介	本館研究部歴史研究系
松尾 恒一	本館研究部民俗研究系
山田 慎也	本館研究部民俗研究系

※研究組織の◎は代表者、○は副代表者、所属等は在任時のものである。

案内図



●交通案内

京成電鉄利用の場合

京成上野駅から京成佐倉駅(特急利用の場合約55分)下車、
バス約5分または徒歩15分 ※一部直通バスあり

JR東日本利用の場合

東京駅から総武本線佐倉駅(快速利用の場合約60分)下車、
バス約15分 ※一部直通バスあり

自動車利用の場合

東関東自動車道「四街道IC」または「佐倉IC」から約20分
※無料大型駐車場完備

歴博のめざすもの 事例集1 博物館型研究統合の実践

2010年3月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-0123 (代)
<http://www.rekihaku.ac.jp>



表 紙：洛中洛外図屏風 歴博甲本
裏表紙：太鼓・箏（銘「葉菊」）
※ともに国立歴史民俗博物館蔵